

侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～

原作 AL 漫画 GEN

6



侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～

原作 AL 漫画 GEN

6



CONTENTS

第 22 話

急変

003

第 23 話

内部告発

017

第 24 話

霧の世界

051

第 25 話

霧の中

95

コミカライズ記念書き下ろし短編小説

フィールドワーカー（民）

165



あさお
朝起きると

かふくぶ
下腹部に北の御山
エレクトイオン山が
そびえ立っていた

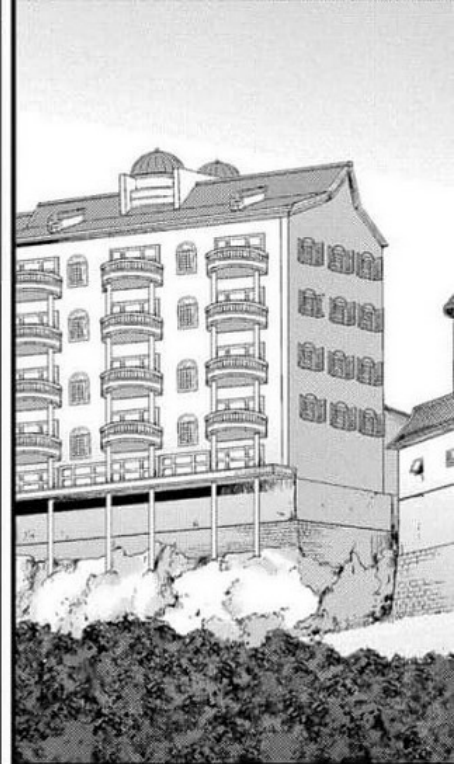
きのう
昨日は母と
話していたせいで
やれなかったしな…

たった1日の
禁欲でここまでに
なるとは…

せい・ちよう
成長も
著しいような
気がする

とじよう
登城してきたミニットを
コレで思いっきり
可愛がりたいのだが

はは
さすがに母が帰った
翌日の朝食前から
盛るわけにもいかない



第22話 急変

昨晚

ファニーは
俺の寢室に
来なかった

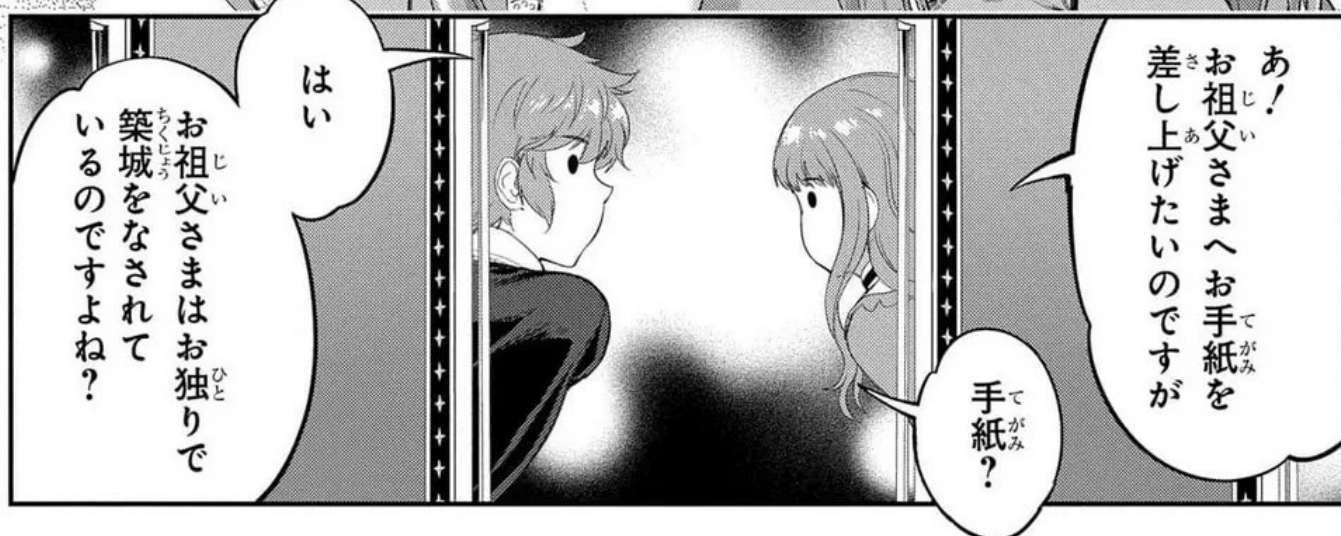
生理継続中
なのだろう



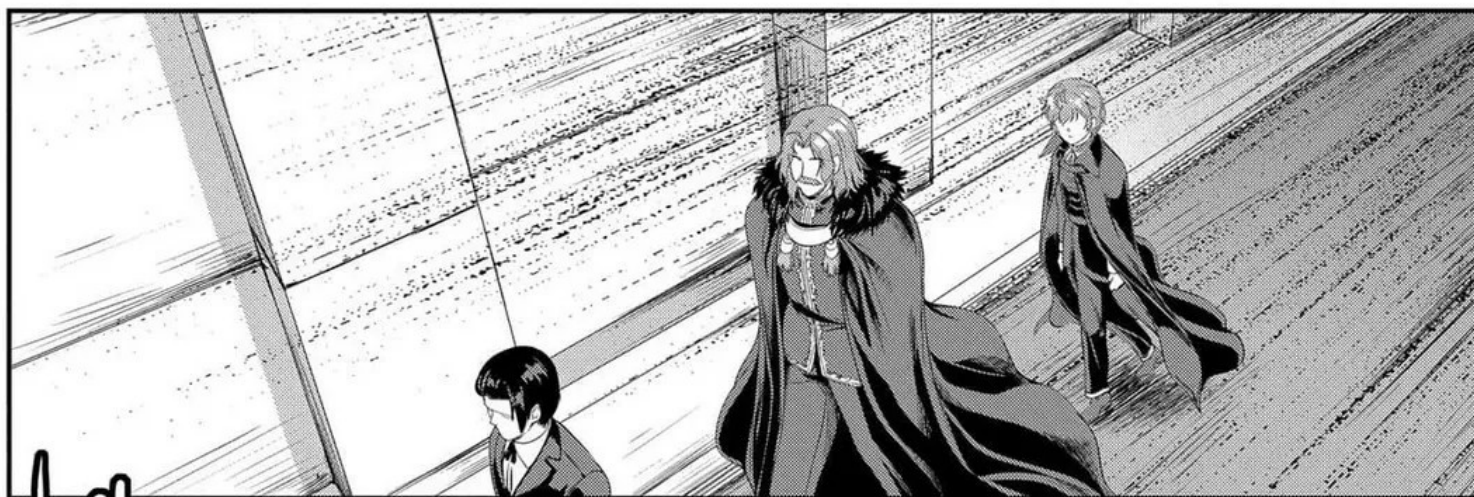


わたくしは城で
お兄さまのお帰りを
お待ちしております

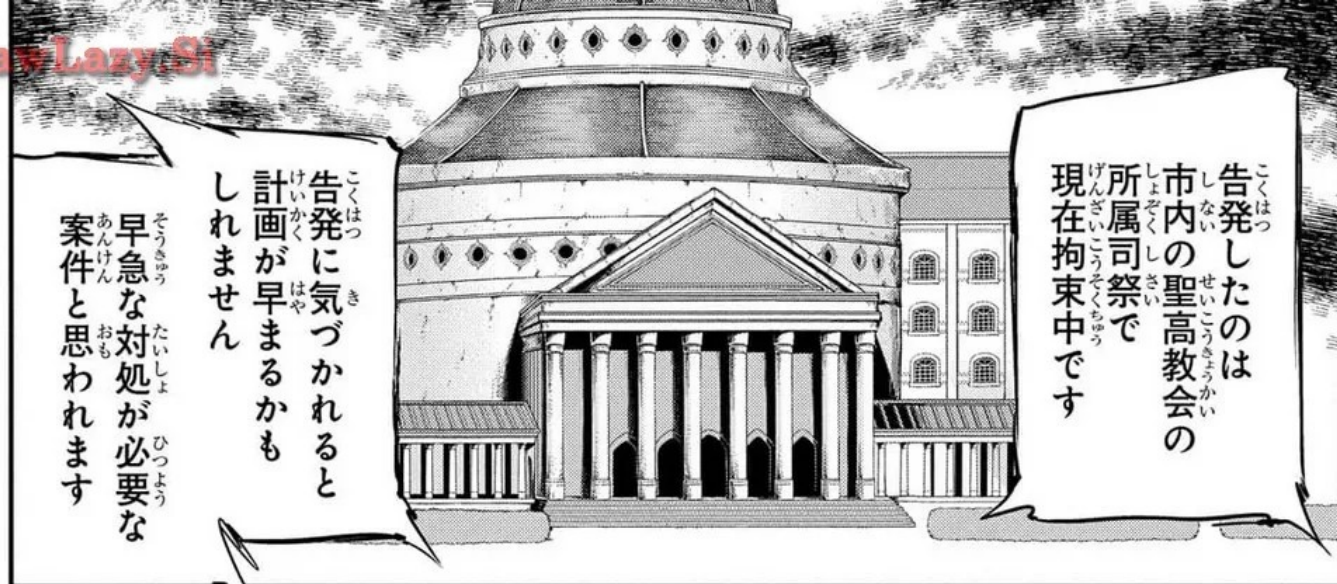
抱きしめたい、
この笑顔。











告発したのは
市内の聖高教会の
所属司祭で
現在拘束中です

告発に気づかれると
計画が早まるかも
しれません
早急な対処が必要な
案件と思われま



司令部へ向かう
護衛を用意しろ

ウィルク
お前は城に残れ
警備の指揮を執って
守りを固めるのだ



父の行動は
早かった

……はい



メルリイと
ファニイを頼むぞ

すぐに軍を起こし
瞬く間に聖高教会を
完全に包囲

教会内に魔力持ちが
いないことを確認した父は
城に戻り俺に後を任せた

他の仕事
忙しいようで
早めに切り上げた
たかったそうだ

代役を引き受けた俺が
包囲網に到着する頃には
もう教会は制圧されていた

抵抗はほとんどなく
あっという間に
降伏したらしい

これでめでたし
めでたし——

——とは
ならなかった

首謀者と目される
教会長や他の司祭達を
捕えられなかっただろ？

早朝に慌ただしく
出かける姿が
目撃されたそうです

……
告発した司祭に
詳しい話を聞く
必要がありそうだな



その司祭^{しさい}でしたら

軍事拠点^{ぐんじきょてん}の
司令部^{しらいぶ}にて
拘束^{こうそく}中です



わかった

俺^{おれ}が直接^{ちくせつ}
尋問^{じんもん}しよう—



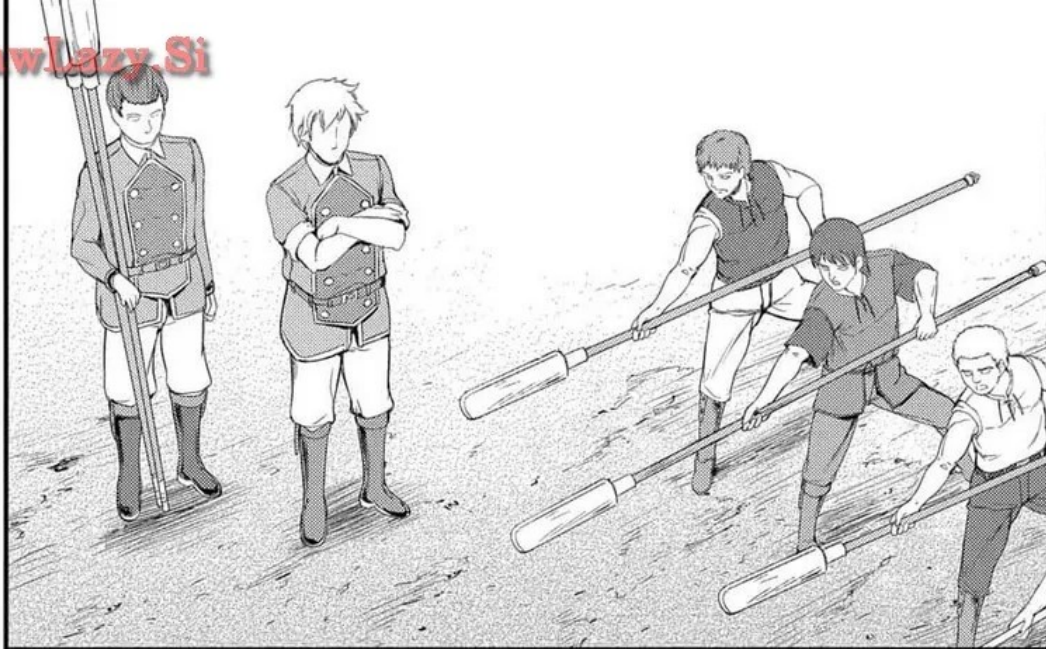
侯爵嫡男好色物語
～異世界ハーレム英雄戦記～



第23話 内部告発

ニューネリー軍事基地
ぐんじきち

領内最大の軍事施設で
クオルデンツエ軍の本部が
設置されている場所である



徴兵で集められた領民兵や
賃金で雇用された工務兵
騎士家を出自とする
武官などが詰めている



犯罪者を放り込む牢や
取り調べのための施設も
ついでに併設されており

例えば従祖が大人数で
並んで歩いていると
不審者としてここで
尋問されたりもする

と分けることができ

市中

城下町

城

ニューネリー市は
城壁で線引きすると

開拓結社の本店や別邸は
「城下町」エリアで
ニューネリー軍事基地は
「市中」エリアになる



こくはつ
告発したのは
いつそやの
おっばい司祭

シンシアだった



こくはつじたい
告発自体が聖高教会の
けいかく
計画のうち――

という可能性も
か
考えられますので
げんじゅう
厳重に拘束をしています



……かもしれんが
この部屋ならば
かんたん
簡単に逃げ出すことは
できないだろう

はず
外してやれ



お言葉ですが
かのじょ
彼女は従祖です……

せめてこちらの従祖兵が
なんにん
何人か戻るまで
お待ちいただけませんか？

む？

魔封印は
まふういん
施されているようだが
ほこ



もし本当にテロ活動が
あった場合従祖兵は
大きな戦力になります

彼女の魔封印のために
魔力を使ってしまうと
戦いに使えません

そのため最小限の
魔封印にとどめています
いつ崩壊しても
おかしくありません



なるほどな

魔法は身体の内側にある
魔力を開放することで
発動する

魔封印を施されると
それができなくなるので
必然的に魔法が
使えなくなる

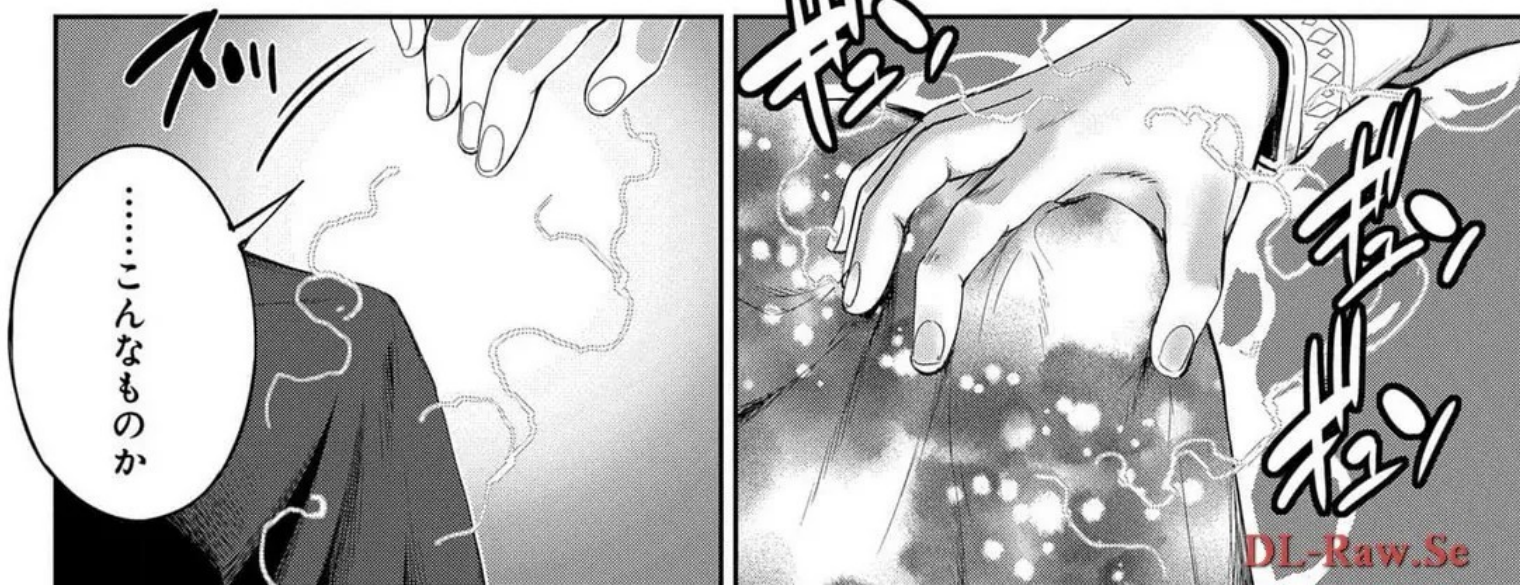
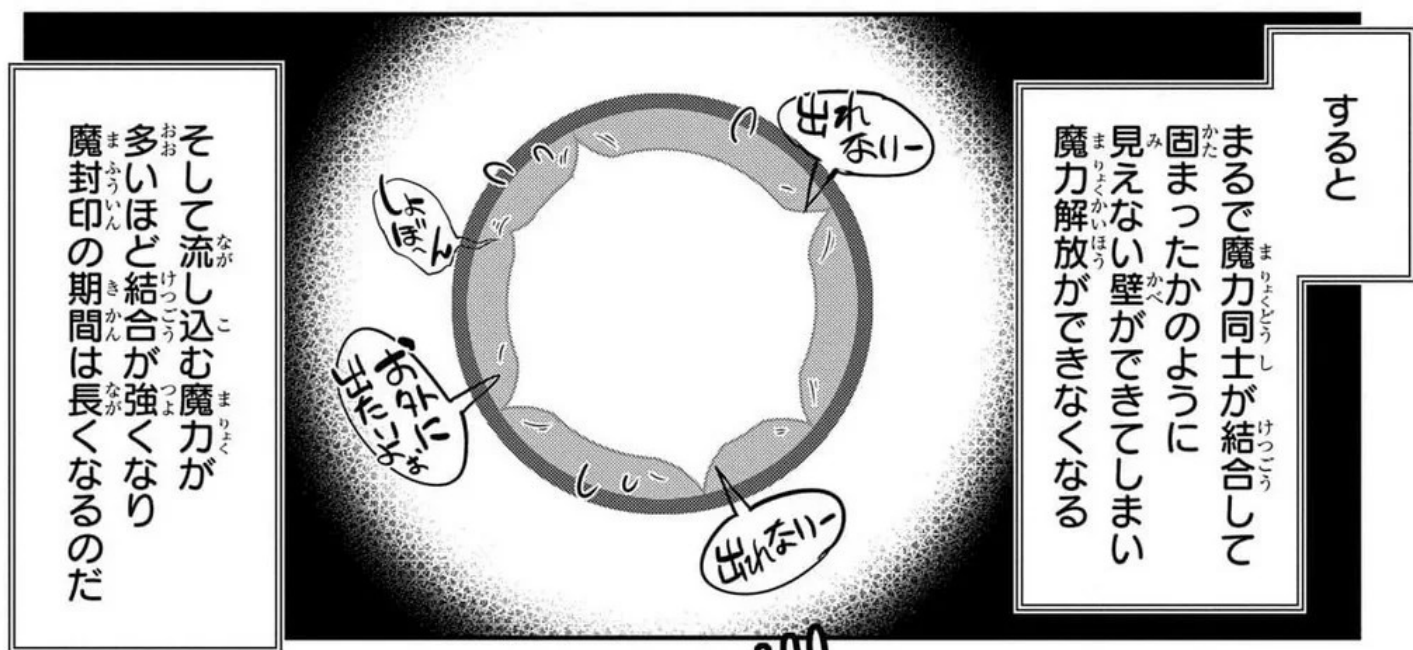


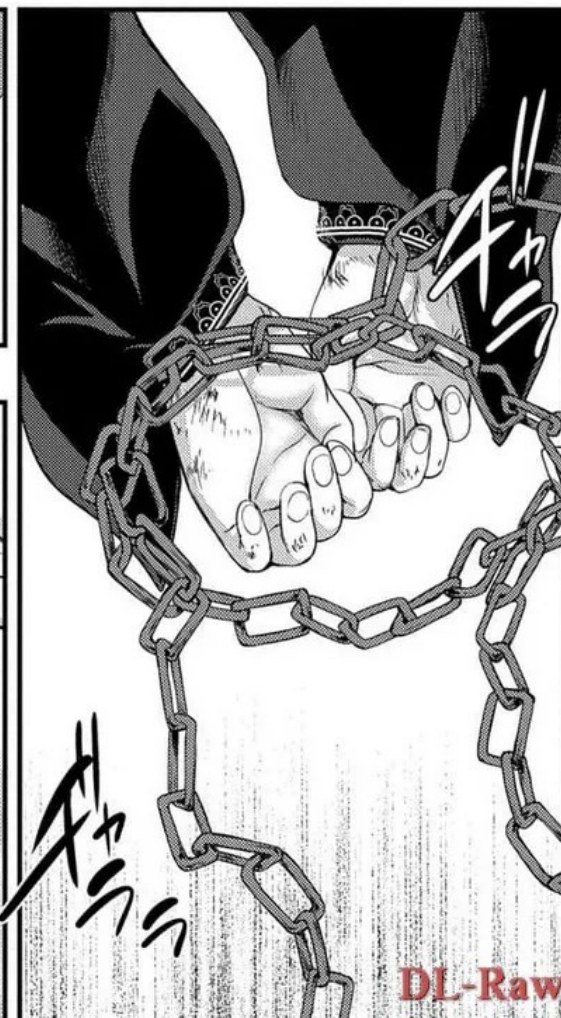
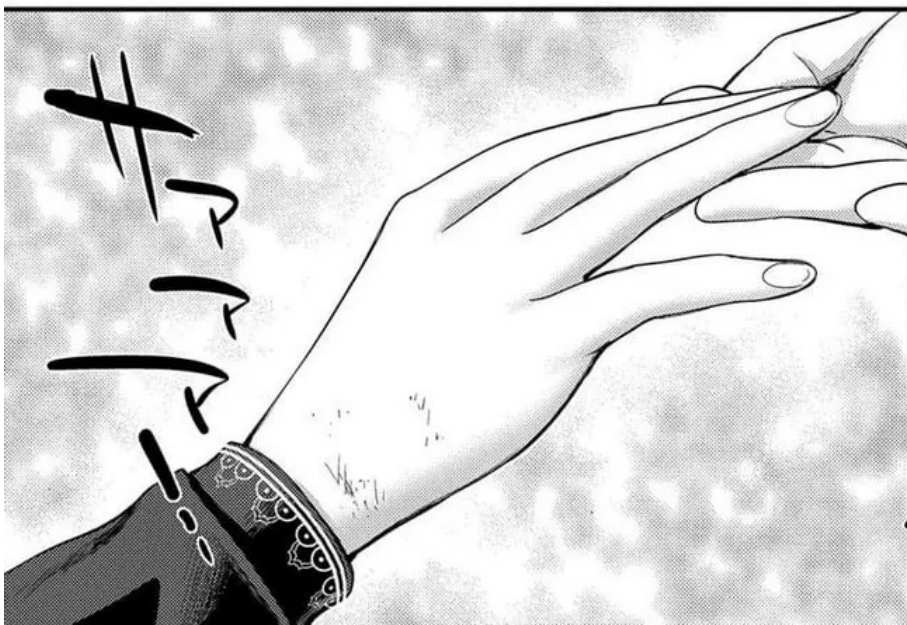
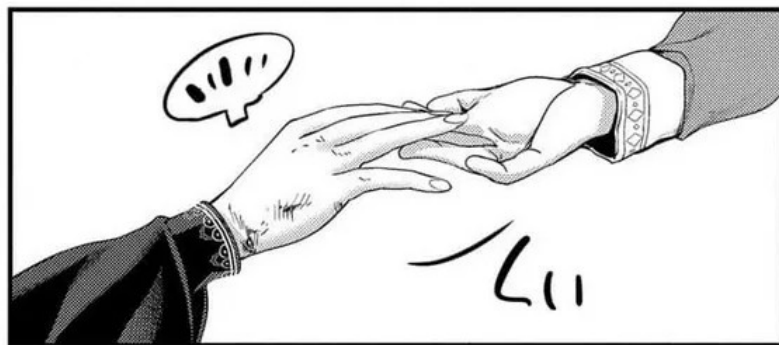
よし俺が
やろう

お手を煩わせて
しまい
申し訳ありません

魔封印は純粋な
魔力量がモノを言う

従祖が同じ従祖を
封じるのは一苦労だが
主祖が格下の従祖を
封じるのは簡単だ





寛大^{かんだい}なご配慮^{はいりよ}に
感謝^{かんしゃ}を致します

心優しい貴方^{あなた}に
幸運^{こううん}の精霊^{せいれい}レチュポテンプの
お導き^{みちび}がありますように

実に聖教徒^{せいきょうと}らしい
物言^{ものい}いだ

弱者^{じやくしゃ}を助けた
人間^{にんげん}の前に現れ
良い運命^{うんめい}を恵^{あづか}んでくれる
精霊^{せいれい}だったか

単^{たん}に後日^{ごじつ}おいしく
いたたく予定^{よてい}なので
余計^{よけい}な傷^{きず}が残り^{のこ}れては
困^{こま}るだけなのだ





さて

せいこうかい
聖高会の司祭
しんシアだ
な
お前に改めて
聞きたいことがある

…なんなりと

たいよう
太陽の大精霊
うおーてんとサーマに誓って
嘘偽りは申しません



きょうかいちやう
教会長が
隠れられる場所や
行き先に
心当たりが
あれば答えよ



おそろく……



……

にゅーねりー市
ニューネリー市の
南に広がる

フィールドだと
おもいます





...

いま
今にして
振り返ってみれば
奇妙なことも...

きょうかいちやう
教会長は普段から
フイールド探索に行く
冒険者と親しくして
おりました...



おうと
王都での冒険者優遇政策が
始まってからニューネリー市の
冒険者がかなり減ったのは
ご存じでしょうか

ああ

きょうかいちやう
ところが教会長と懇意に
していた冒険者は
ひとり
一人も欠けてないのです



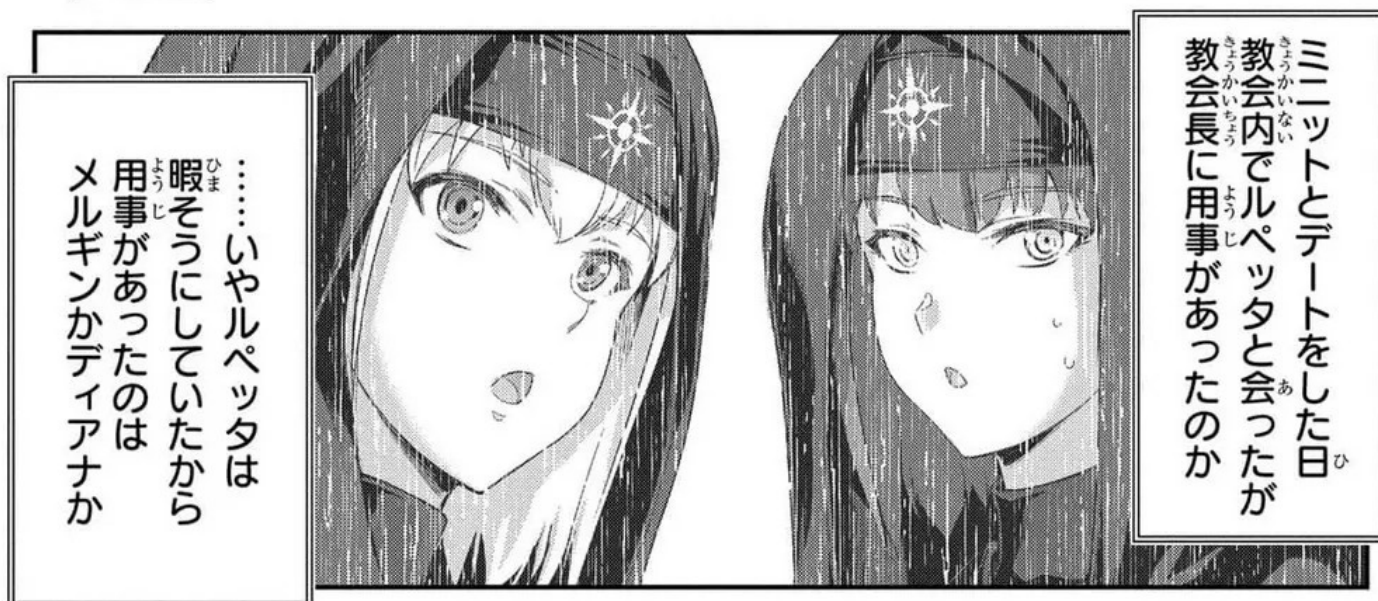
せんじつ
それどころか先日また
教会長と親しげな
冒険者が訪れたのです

にんぐみ
3人組でしたが
驚いたことに
全員が従祖でした

ほう
珍しいな

ほうけんしや
冒険者の
従祖は希少だ
それが3人...

.....ん?







魔法を使つて
盗み聞きを
試みました

初めてのことで
聞いたのは
わづかでしたが――





クオルデントツエ侯爵家の
力は強大です

いかなる謀か
存じませんが

おも
思いとどまつて
ください

うまくいくはずも
ありません



いや

貴族の矜持を消し去り
圧政に踏みつけられた
我々の信仰を取り戻す

そのためには

すべてを犠牲に
しなければならぬ



むしろシンシア

君こそ従祖の
司祭として

我々に協力して
もらいたい



……考えさせて
ください

……確かに聖高会
はレヴィオス王国で
迫害を受けています

教会を支える立場なら
憤りを覚えることも
あるでしょう

でも

それを晴らすために
無関係な市民を巻き込む
ことは間違っています!!

この地に生きる教徒に対する
大きな裏切りではありませんか



……そう考^{かん}えて
告^{こく}発^{はつ}したの^なだな？

まあ筋^{すじ}は
通^{とお}っているが……



多^た分^{ぶん}

シンシアが
説^{せつ}得^{とく}しに^き来^きた時^じ点^{てん}で
教^{きやう}会^{かい}長^{ちやう}は逃^にげる算^{さん}段^{だん}を
した^なん^だらう^なあ……

隷^{れい}祖^その教^{きやう}会^{かい}長^{ちやう}が
従^{じゆ}祖^そのシンシアを
倒^{たお}せるは^ずも^ない^ので
逃^にげる^しか^ない



だ^が肝^{かん}心^{しん}の部^ぶ分^{ぶん}が
抜^ぬけて^いる

大^{だい}規^き模^ほな
テロ攻^{こう}撃^{げき}と
言^いわ^れて^もな……

魔^ま力^{りき}持^もち^でも^ない
教^{きやう}会^{かい}長^{ちやう}が^でき^るこ^とな^んて
た^かが^しれ^てい^る

何^{なに}を^する^と
い^うの^だ？



...



それは……



……
そうだな



しばらくは市内を
警戒しつつ
教会内の捜索を
続けるべきでしょう
計画に関する
資料があるかも
しれません



協力的であるのならば
決して悪い扱いはしない

ありがとうございます

私はどのような
協力でもいたします



司祭シンシア

計画とやらの全貌が
明らかになるまでは
身柄を拘束させてもらう

覚悟の上です

じゃあちよつとベッドで
協力してもらおうかな

そそ
注ぐのは
魔力ではなくて
俺の子種な感じで
—なんて

隊長殿！
たいちよんの

どうした？

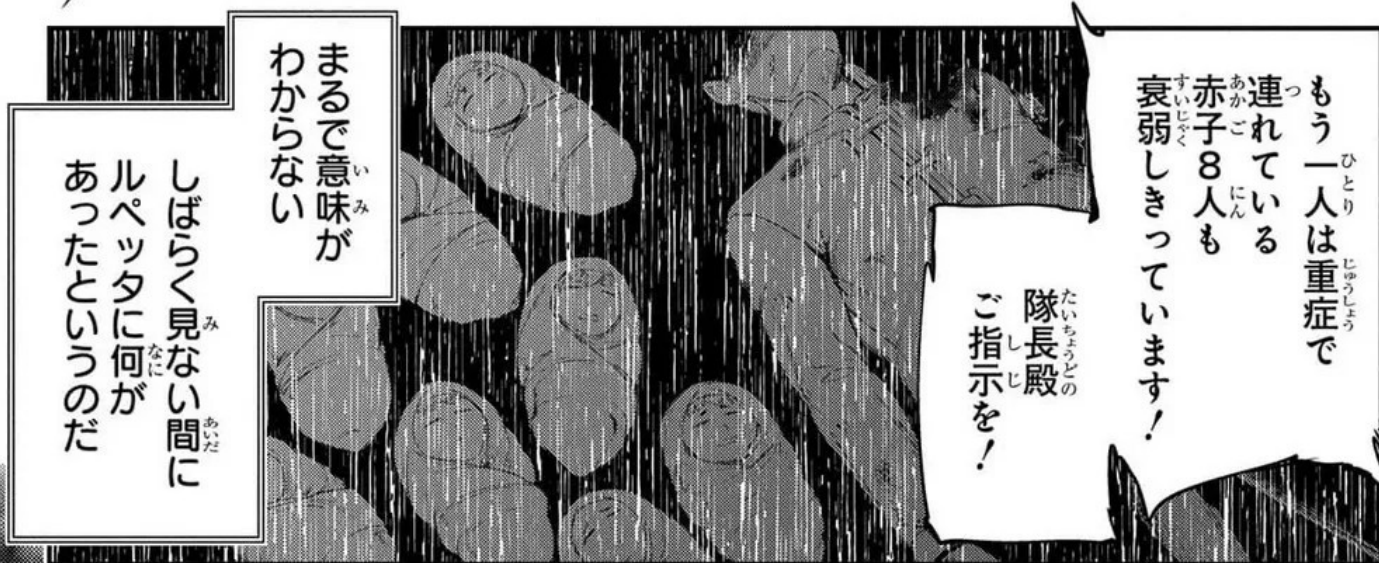
きょう
今日はなんとも
あわ
慌ただしいな



そのうちルペッタと
名乗る子供が
隊長殿と話がしたいと
騒いでおります！



市外門で
岩塩泥棒の
冒険者2名を
捕縛しました！



まるで意味が
わからない

しばらく見ない間に
ルペッタに何が
あったというのだ

もう一人は重症で
連れている
赤子8人も
衰弱しきっています！

隊長殿
ご指示を！



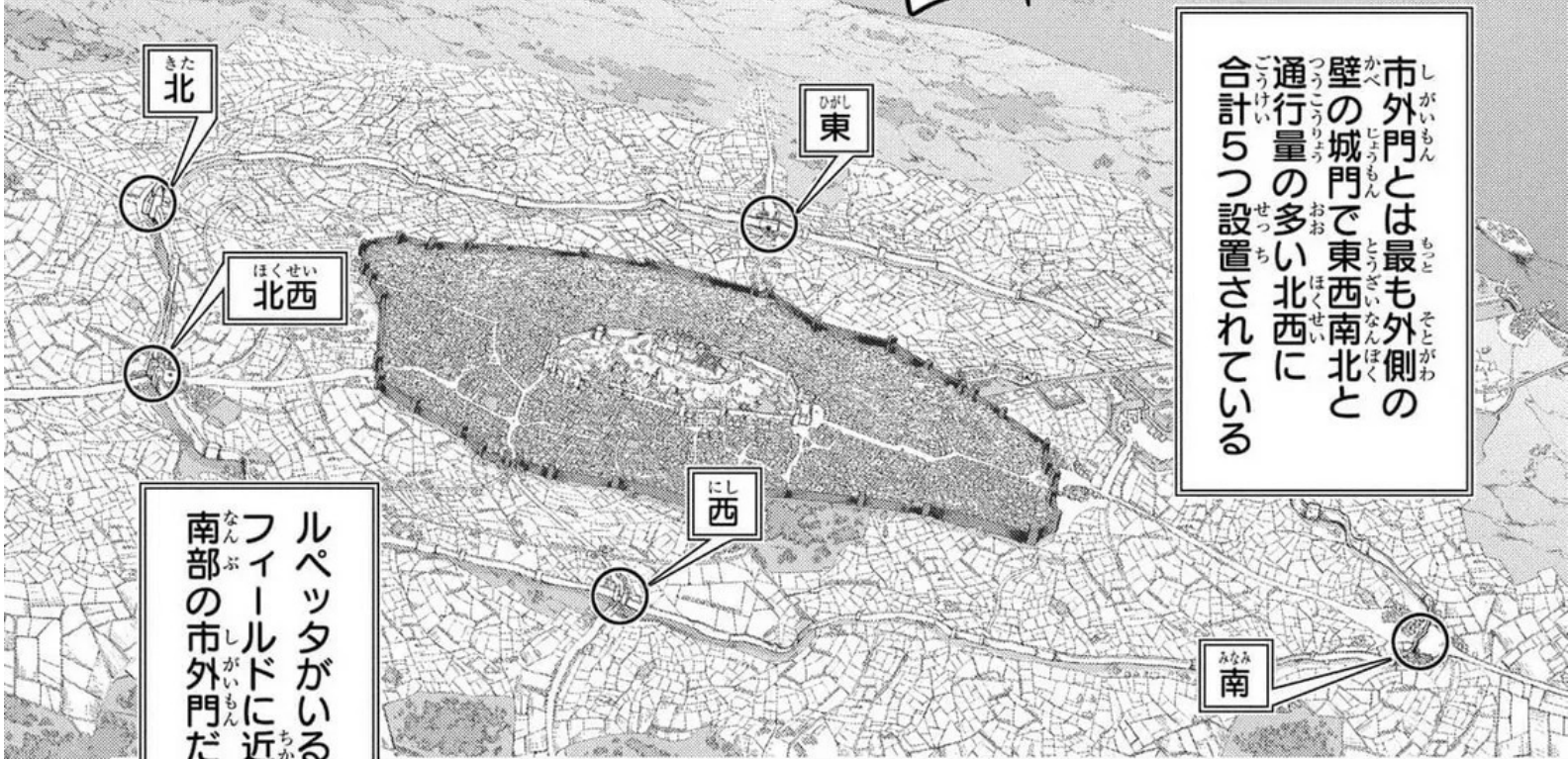
あんたって
人はおあも〜川
もと川〜と
盗って来い〜

俺との間にデキた
子供が8つ子で

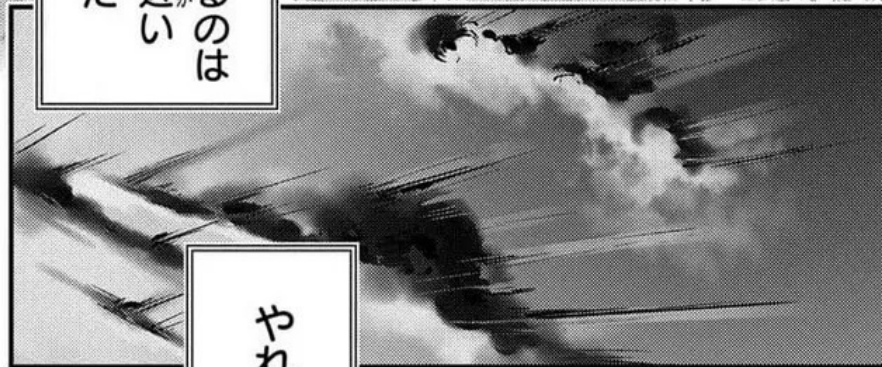
わずか1週間で
出産し

金を稼ぐために
ニューネリー特産の
岩塩も盗み

育児ストレスから
メルギンをボコボコにして
しまったのだろうか

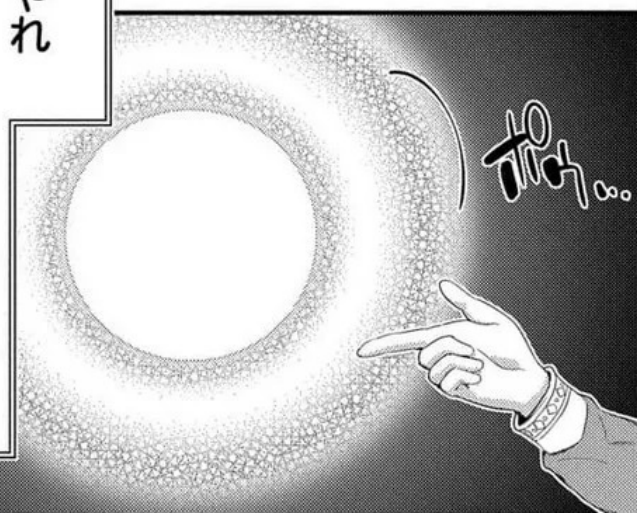


ルペッタがいるのはフィールドに近い南部の市外門だ



やれやれ

ナンボナン行きの準備どころではなくなってしまったな



俺はフィールドに
逃げたと思われ
教会長の足取りを
探るといふ体裁で
市外門に来た

平民の呼び出しで
ホイホイ動いては
貴族の威厳が
なくなるためである

ああ

若様
こちらへ





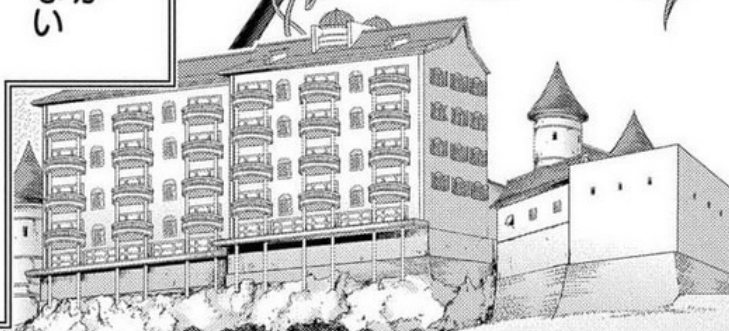


ここは別邸の
寝室ではない
公の場だ

公式の場で平民に
気安く接せられることを
よしとしていては

俺の経歴に傷が
つくかもしれない

俺は快適な人生のためにも
絶対に家長の地位を
相続したいと思っているのだ



……許す

だが次はない

ルペッタがすぐに
謝罪をしたのは
よかった

そのおかげで
『寛大な心で
許してあげる』
ポーズができる

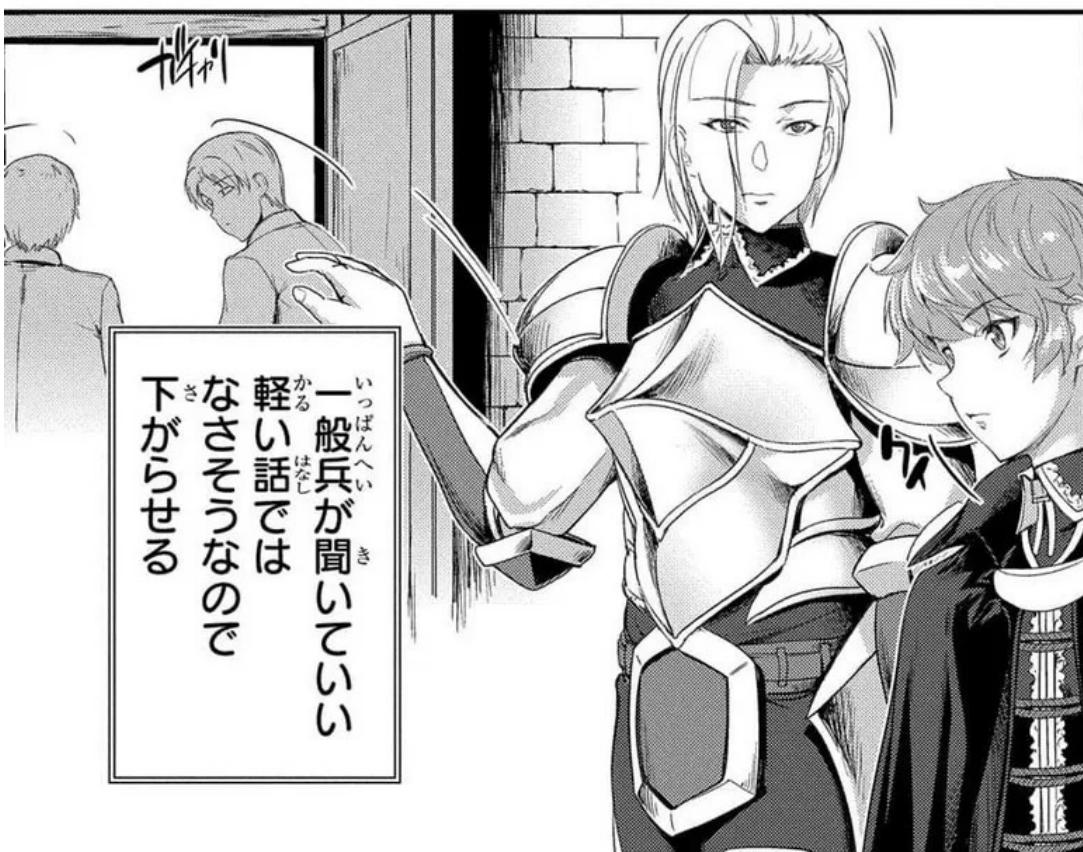


下手を打つたら
メルギンよりも先に
死ぬことになっていた

それくらい貴族に
接する際の態度という
ものは大切なのだ

俺はルペッタを
気に入っているのだ
そんなつまらないことで
死なせたくなはない







詳しく
話をしろ

聖高会の貴族とは
なんだ？

聖ナヴェンポスの
高位司祭のことか？



話します

だから
隊長殿

お願いします



私

なんでも
します

だから
メルギンを

メルギンを
どうか助けて……

ください……



メルギンは聖高会の
貴族と戦って
怪我を負ったの…!!

お願いします……!

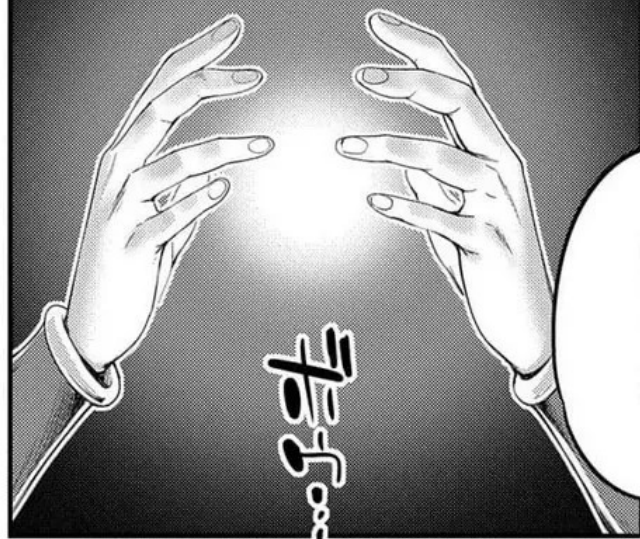
私は
隊長殿しか

ニューネリーに
頼れる人が
いない……

お願い
します……!

もしメルギンが
死んじゃったら――

お願い
します……!



死なせるな

おうきゅうしよち
応急処置をして
基地に運んで
治療をしてやれ

.....
戦った本人からも
話を聞く必要が
あるだろう



はっ!







……では
話の続きだ

いったい
何があった？

フィールドに
入ったときから
順に話せ



……はい

あれは1週間と
少し前のこと

わたし
私とメルギン

そしてディアナ達は
フィールドに
向かいました……



侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～







声をかけたいのに

身体が
動かない

俺は
どうなつて
しまったんだ……



フィールド——

……

そうだ

フィールド……



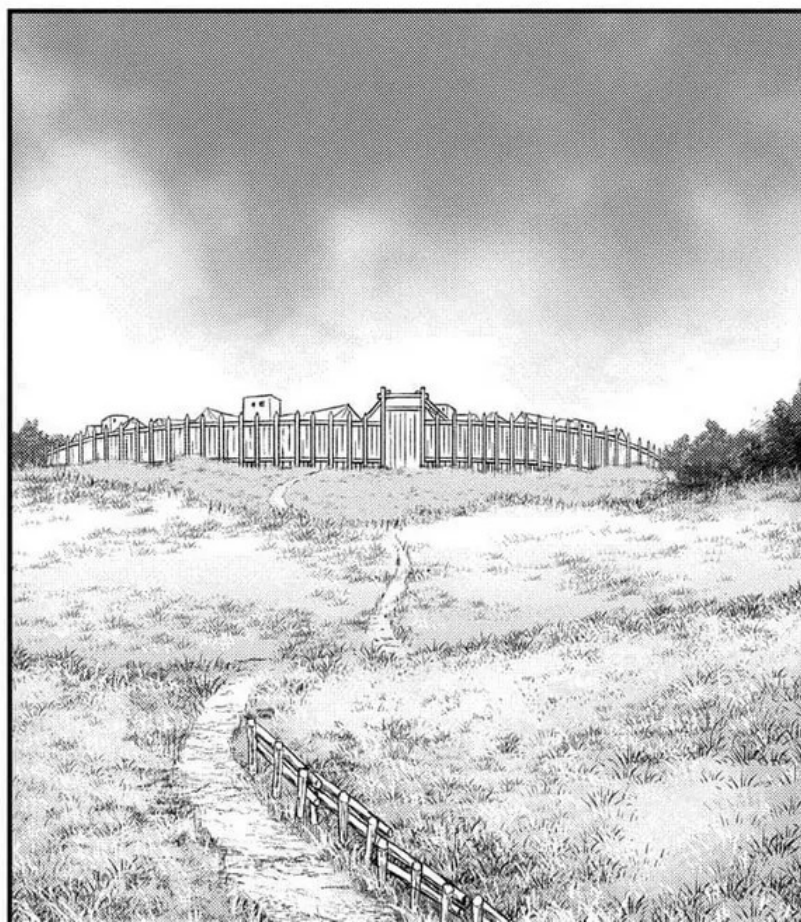
俺とルペッタは
あいつらと
フィールドに
向かつて

そこで——



着いたな

ニューネリー
フィールドだ







ほんとう
本当に
だいじょうぶ
大丈夫なのか？

またつか
また捕まったり
しないだろうな？



こうしやくけ
あれは侯爵家の軍事拠点
はい
フィールドに入る冒険者の
しえんかつどう
支援活動もしてる

……だって



……きぞく
貴族の軍隊に
ぐんたい
近づくのは怖いわね
ちか

じゅうそ
従祖が6人も一緒だと
しゅうげき
襲撃と勘違いされたり
かんちが
しないかしら



しょうじき
そうだよ
正直なところ
かか
関わりたくない



メルギンも
なかなか
こないだ中々
しやくほう
釈放されなかったよな？



だよなあ
またつか
また捕まったら
こんど
今度はどうなるか



ちゃんとした人に
聞いた情報

大丈夫

……誰に
聞いたんだ？

知り合いなんて
いないだろ？

つイルペツタを
信用していないようにも
受け取られかねない言葉を
投げつけてしまった

深い後悔を覚えたが
口に出さずには
いられなかった



ルペツタはお世辞にも
社交的とはいえないし
人見知りをするタイプだ

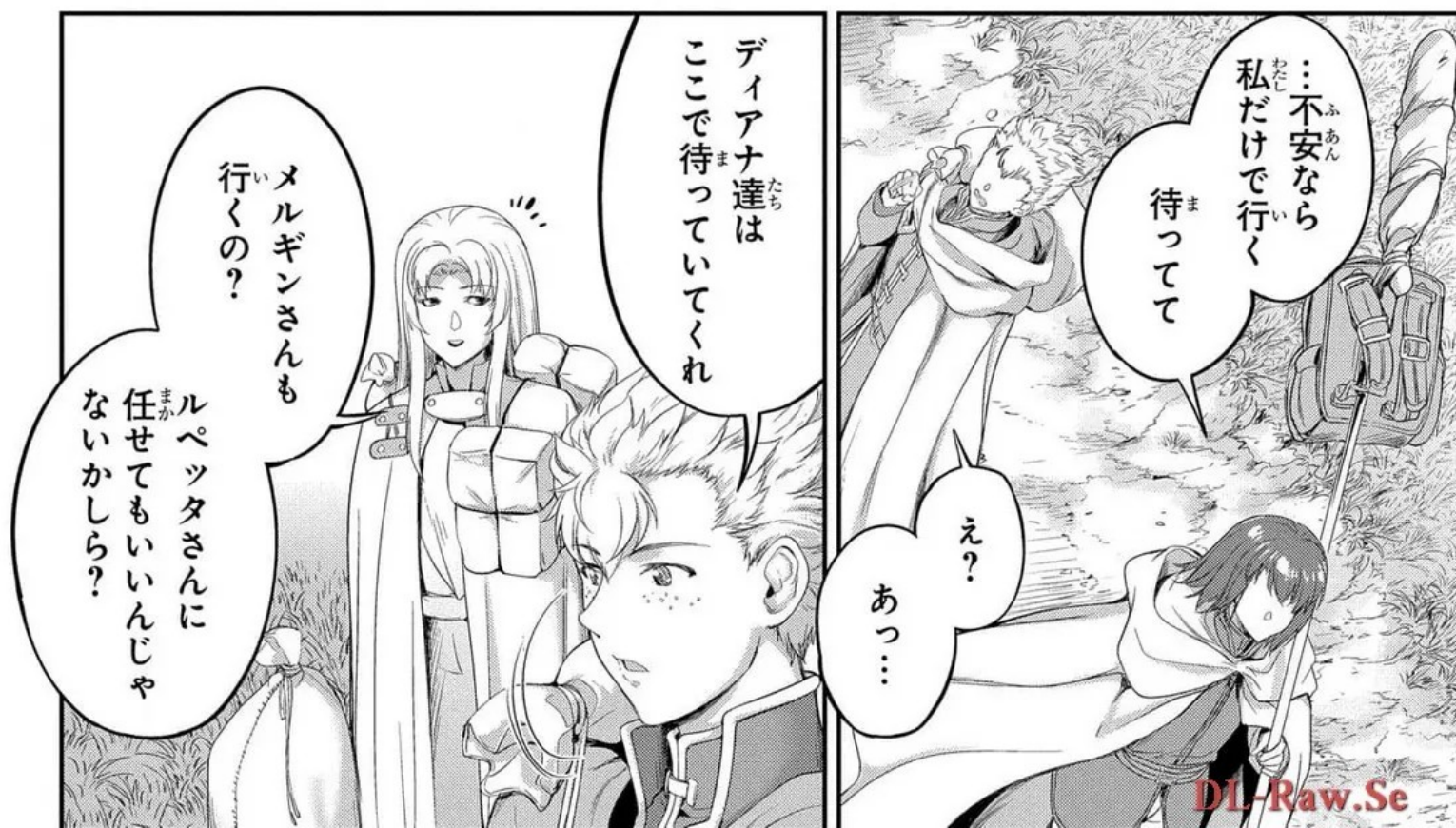
知り合いのいない
ニューネリー市で
そんな情報をどう
得たんだろう…



俺の知らないところで
誰かと……

男と親しげに
話をしていることを
想像しただけで

胸がムカムカ
してくる





だがせっかく訪れた王都は
冒険者が溢れかえっていて
あまり実入りが良くなかった

しばらく活動をした後に
クオルデンツェ侯爵領を目指して
再び移動を始めたのだが

その途中で出会ったのが
ディアナ達
新人冒険者4人組だった



年長で
リーダーの女
ディアナ

軽々しい言動が
目につく男
フォーコン

あまり自己主張を
しない少年
セムクス

粗暴な
雰囲気少年
トニトル

驚くべきことに
全員が従祖だった



ルペッタは
いきなり4人も
仲間が増えたことに
拒否感を示した

従祖が4人も加われば
今まで以上に活躍ができるからと
強引にルペッタを説得したのだが

俺の内心は
別にあつた

それは――

ルペッタに振り向いて
ほしかったのだ

俺が故郷の村を飛び出し
シュピアゼイク公爵領に
辿り着いたのは8歳の頃

従祖とはいえそんな長旅を
こなせたのは自分でも驚きだ

だが親もなく頼る相手も
いなかった俺は
すぐに生活に困った

本来だったら
親の仕事を手伝って
社会の仕組みを
覚えていく年齢なのだ

魔力を活かすため
冒険者になった
俺を導いてくれたのが

たまたま出会って
世話を焼いてくれた
2歳年上のルペッタだった

魔獣との戦い方
フィールドの歩き方

武器の取り扱い
戦い以外の魔法

手に入れた魔石の売り方
軍による検問の避け方
文字の読み書き

税のごまかし方……
数えきれないことを
彼女から教わった

あの頃はルペッタのほうが
身長が高かったこともあって
頼りがいのある
大きな背中に見えていた――

姉^{あね}のように慕^{した}っていたルペッタを
一人^{ひとり}の女性^{じょせい}として意識^{いしき}したしたのは
いつ頃^{ごろ}のことだったか

ふと微笑^{ほほえ}んだ彼女^{かのじよ}の笑顔^{えがお}に
ドキリとしたことが
始まりだったことだけは
覚えて^{おぼ}ている

恋心が芽生えてから
弟のように扱われることに
複雑な思いを抱くようになった

変わらない関係のまま
男として見られて
いないことに焦り――

つい心にもないことを
口走ってしまう
ようになっていった

ルペッタのことが
好きでたまらないのに

口から出てくるのは
正反対の言葉ばかりだった

幼少の頃 注目を
浴びようと家具を壊して
騒いだことを思い出す

俺は何も成長して
いやしない……

俺がルペッタを
一人の女性として
見たように

彼女にも俺のことを
一人の男性として
見てもらいたかった
のだろう――……



そんな打算からだ

あの4人と組んだのも
もっと名を挙げれば
ルペッタは振り向いて
くれるのではないか

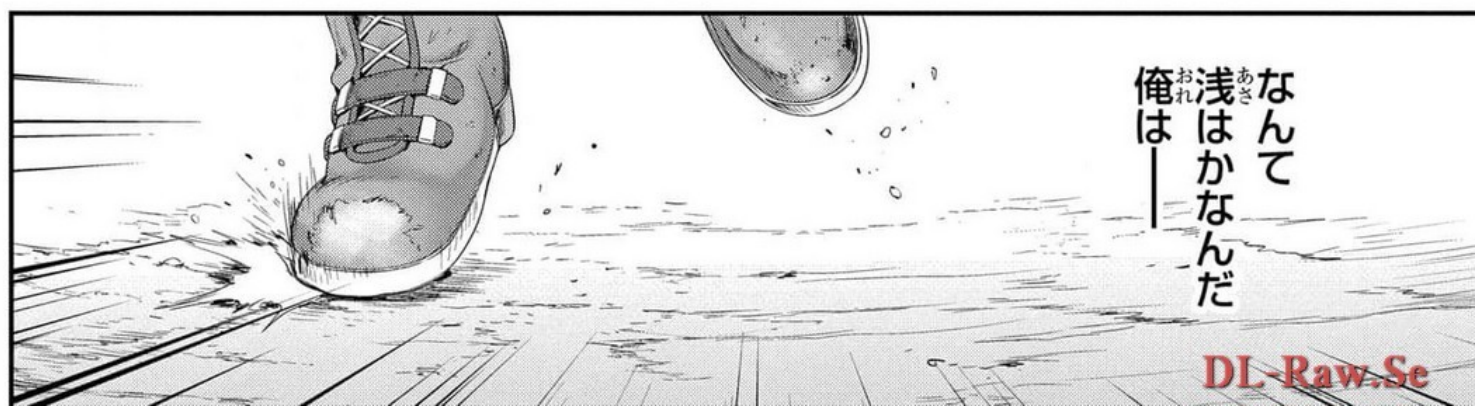
頼りになる一人の男として
俺を見てくれるのではないか……



だが俺が何かするたび
ルペッタから笑顔が
減っていったしまった

まさに本末転倒だ

ディアナに気がある
ふりをしたのも
ルペッタの気を
引きたかったからだ



なんて
浅はかなんだ
俺は——



ルペッタのあまりの
美^{うつく}しさに心^{こころ}を奪^{うば}われて
しまった——…

ルペッタは
化粧を全然しない



そもそも風呂が好きではなく
濡れた布で顔を拭く程度で
清潔感がなく小汚い

そのため実は美人なことに
気がつく人間があまりいない

だけど普段の無表情さから
ぱっと花が開いたような笑顔を
見せてくれるときなどは
とても魅力的なんだ



俺だけが知っている美しさ
俺だけに向けられる笑顔……

それは俺の中の独占欲を
心地よく満たしてくれていた

みちゆ
道行く男達を
つぎつぎ
次々と振り返らせる
ほどもに――

だが
俺が釈放されたときなぜか
ルペッタは信じられないほどに
綺麗になっていた

ほか
他の男にその姿を
み
見せないでほしいと
おも
思う気持ちから

綺麗にしても
無駄だよ

それに
全然可愛く
ないし――

などと
それまで以上に
ひど
酷いことを
言ってしまった……



それが男に……

俺以外の男に
み 見られるためだったら……

かのじょ 彼女が清潔感に
き 気をつけるように
りゆう なった理由……



俺は
どうかしてしまいかも
しれない……

想像上の存在でしかない
男を考えるだけで

殺意の籠った魔力を
解放してしま
い
そうになる……



すなお
ひさ
素直なメルギンは
久しぶり

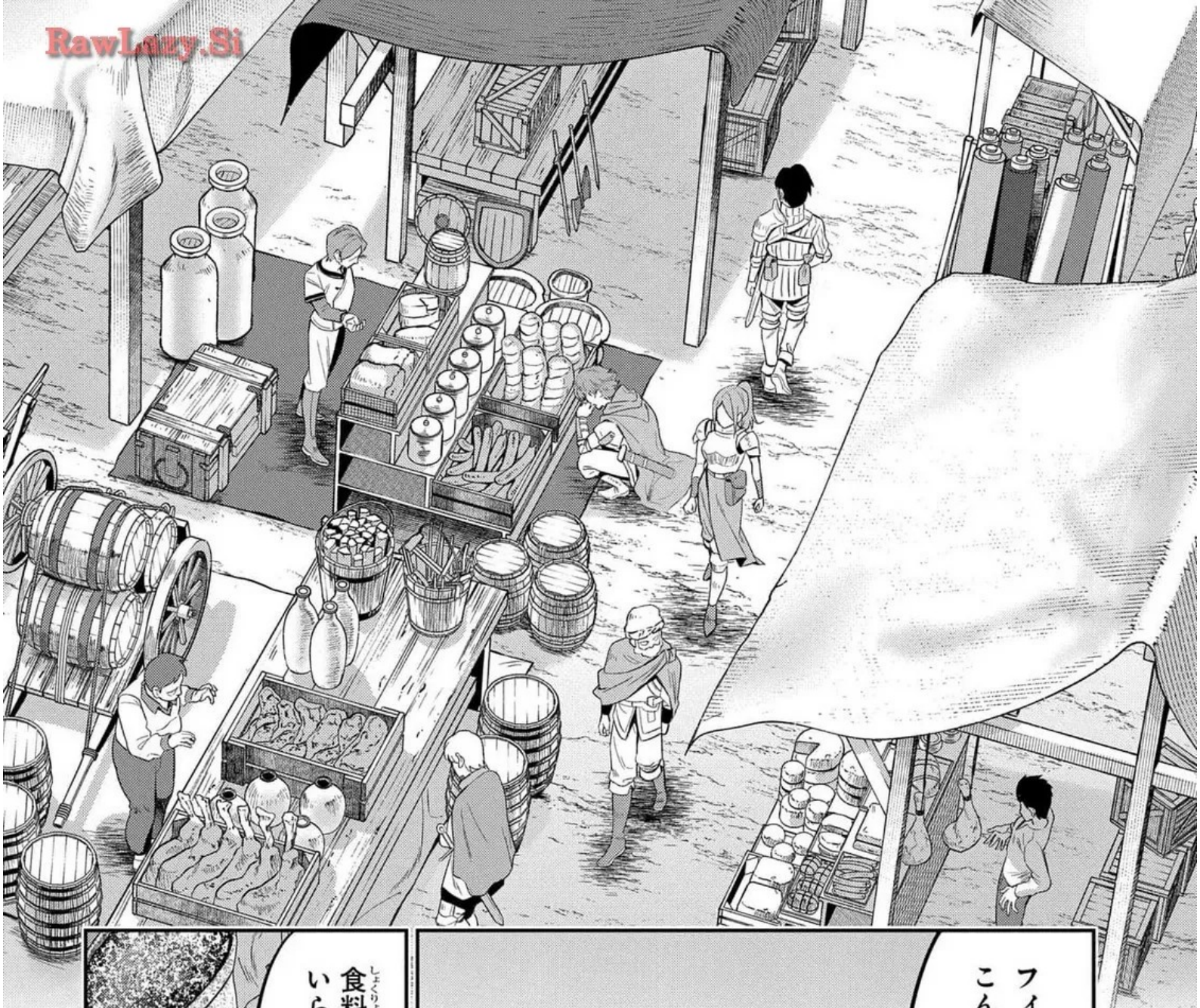
うれ
嬉しい

ルペツタ……

うれ
嬉しかった

おれ
えがお
こんな俺にもまた笑顔を
む
向けてくれたことが

うれ
嬉しかった…
はずなのに――



食料は
いらないね……

そうだな
ちよい割高だし



けっこう賑わって
いるんだな

フィールドのすぐ横に
こんな露天市が……

というのは
ディアナ達4人が
異様に食料を
買い込んでいたからだ

4人ともフィールド入りが
初めてで塩梅がわからず

ニューネリー市内で
団体行動ができず
連絡不足だったからと
言ってたが……

あまりに多すぎるので
捨てようかと話をしたら

食べ物が無駄に
するなんて……!

清貧の精霊の
祟りがありますよ?

豊穡の精霊のご加護を
いっただいなんだと……!!

などと精霊の名を
挙げられて説教された

魔石の買取額は
市内より安いな

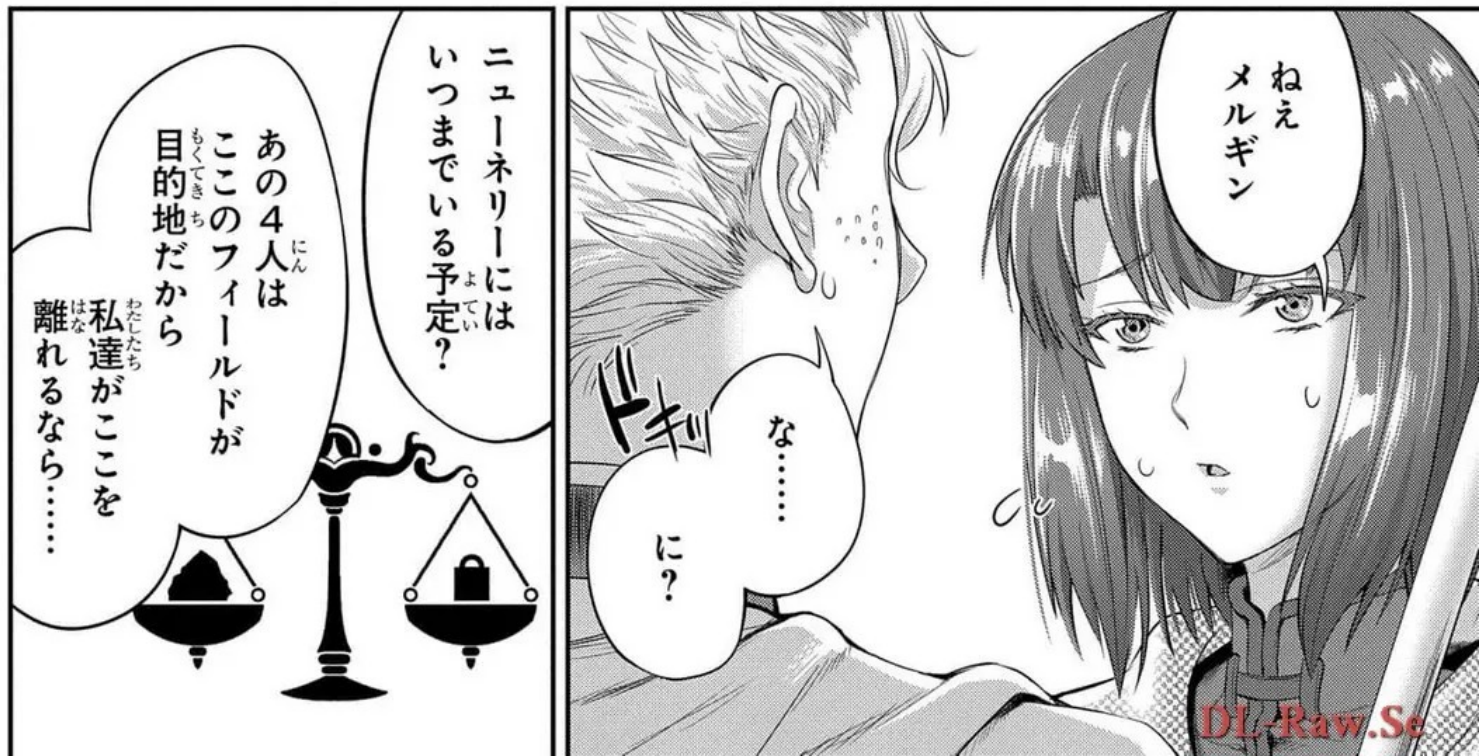
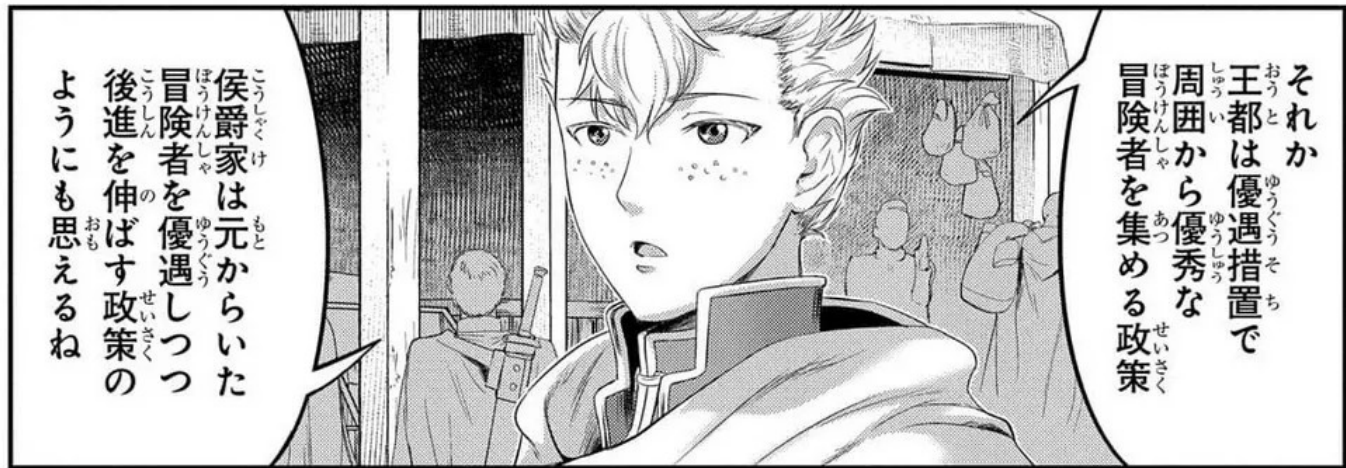
ほんとだ

この拠点内では
魔石の買い取りは
軍公認の商人が
独占しているよ

気を付けるんだね









ディアナ達と
もう組みたくない

そう言いたい
のだろう

……俺がディアナと
比較するようなことを
つい言ってしまう

傷つけてきたからだ



実は俺も
同じ思いだ

そうだな

ディアナ達とは
今回を最後にして
解散しても……

やっぱり
その……

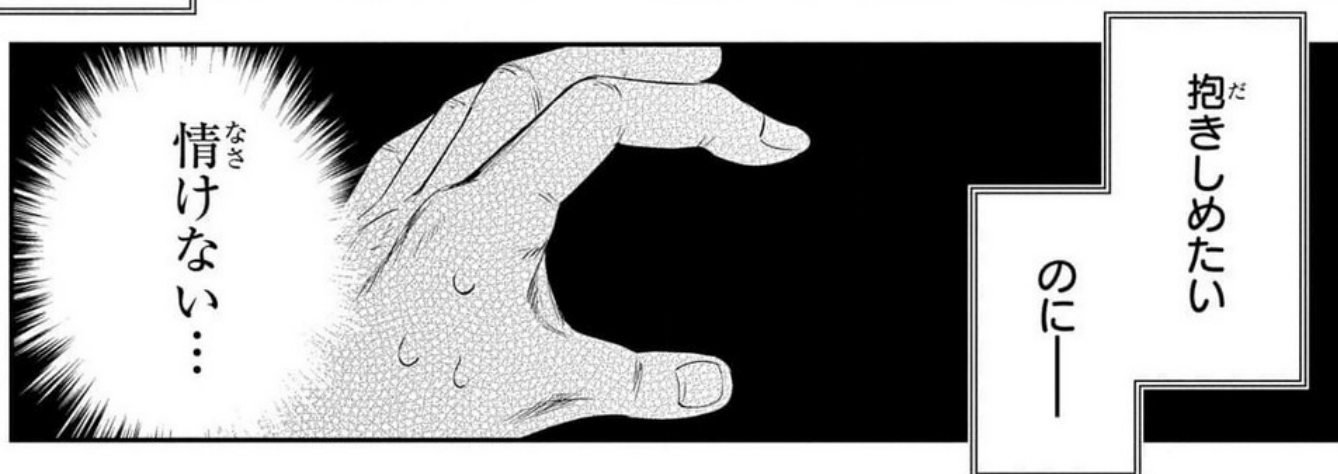


ルペッタと二人で
冒険してたほうが……

俺も

楽しいし……
な……







え……？



なあ……
ふたり
二人になっても

しばらくここに^{のこ}残って
活動^{かつどう}しても
いいんじゃないか？



……



おうと
もと
王都に戻^{もど}ってもしょうがないし
シュピアゼイクは不^ふ穩^{おん}だし

せつかくここまで来^きたんだ
フィールドも大^おきいし
ここで活動^{かつどう}してもいいかなって



ふたり
二人なら
ニューネリー市^し内^{ない}で
いっしょ
一緒に行動^{こうどう}もできるし

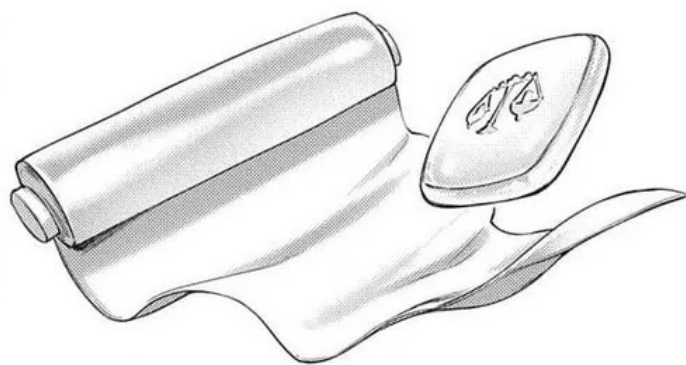
さいしょ
最初^{さいしょ}に捕^{つか}まったことを
考^{かん}えなければ
わる
悪^{わる}くない都市^{とし}だと思^{おも}う……

それに
欲しいものもあるし

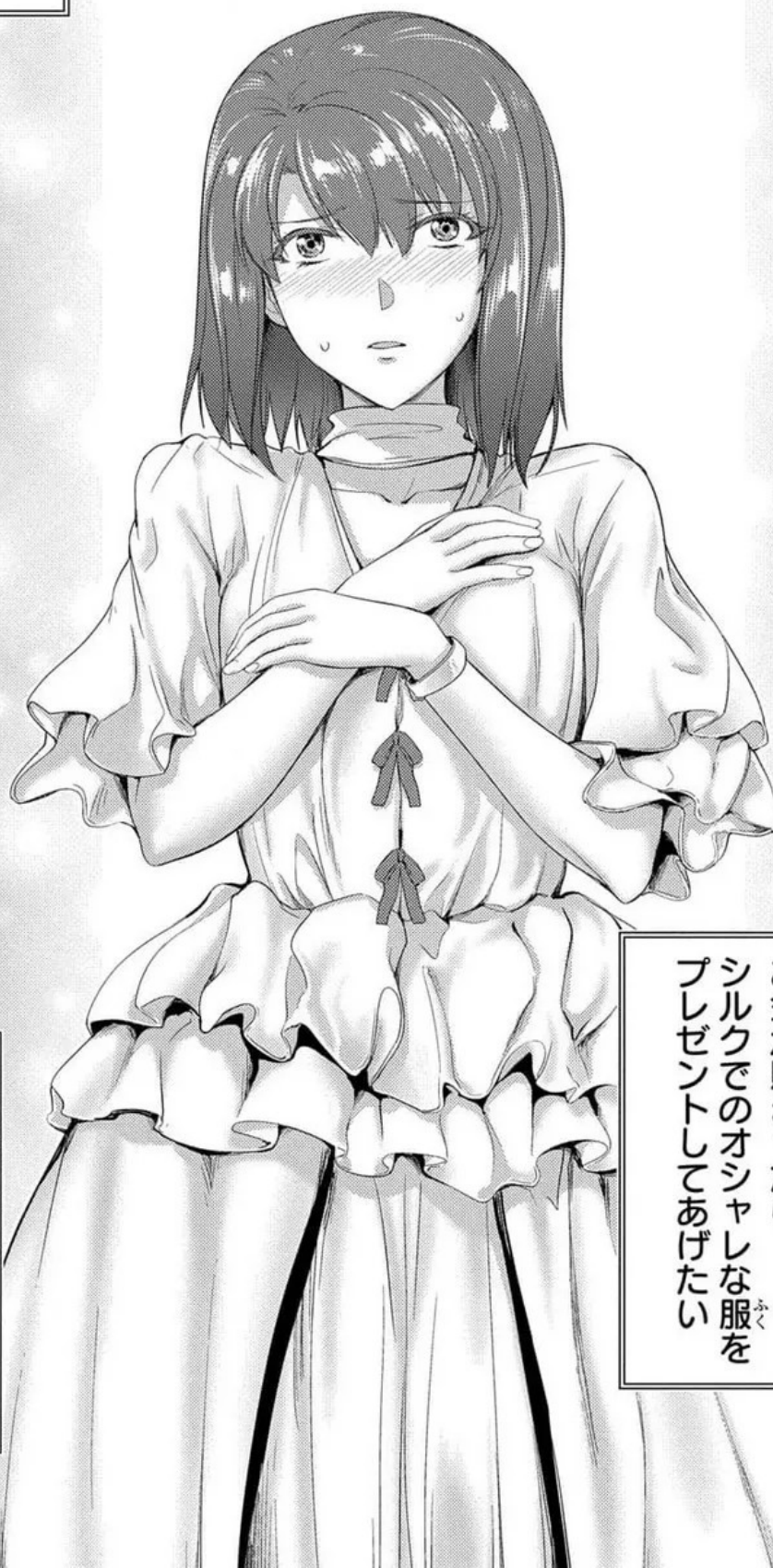
ほ
欲しいもの？

ああ
ちよつと……ね

もちろん
俺のおれ
のではなく
ルペッタのだ



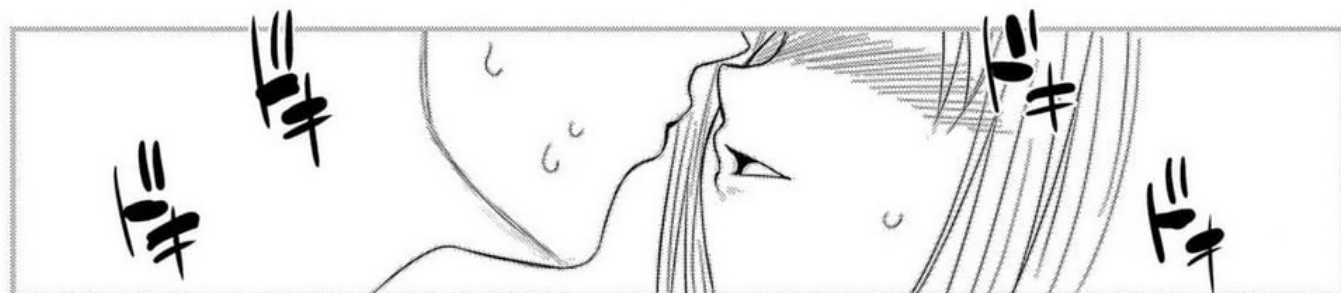
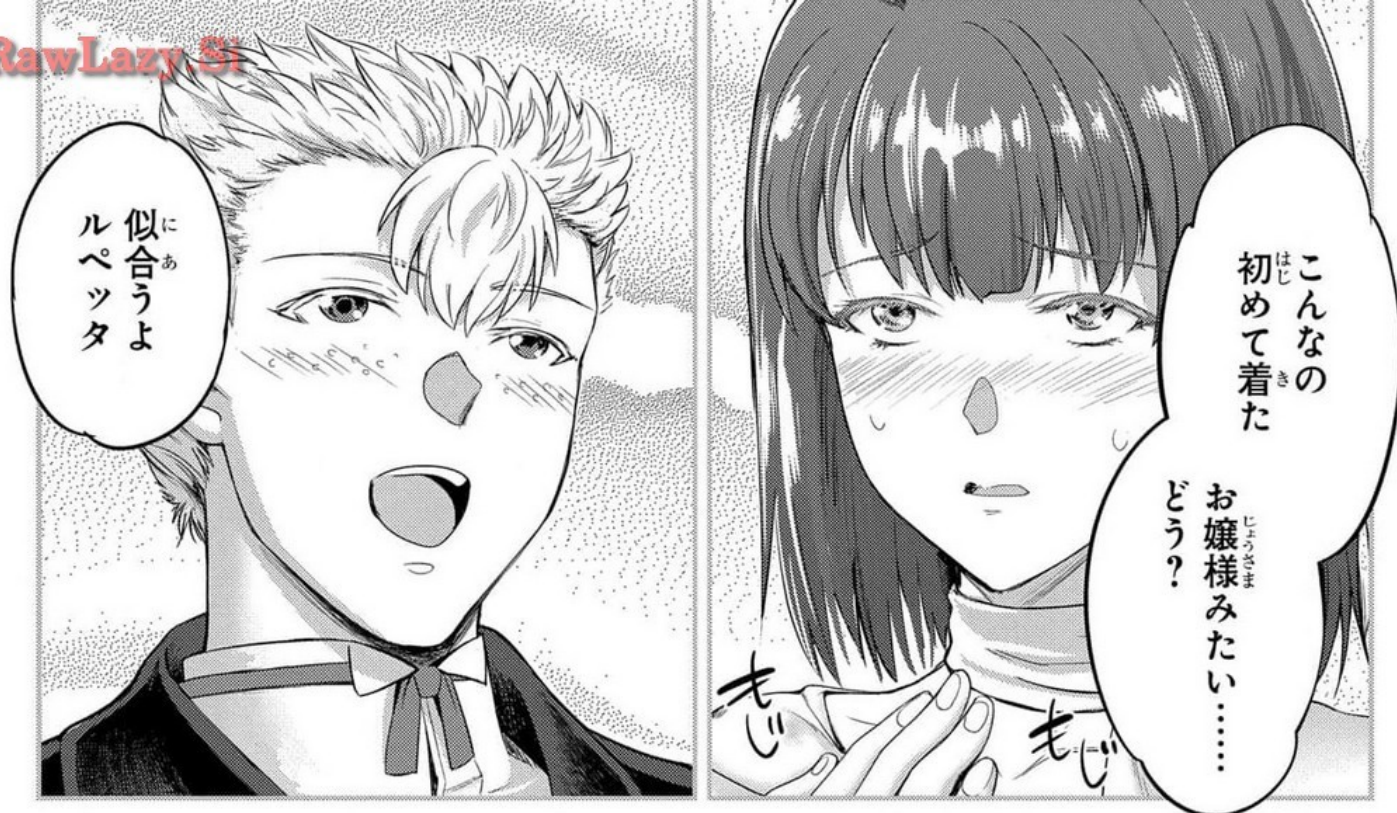
欲しいものとは
ニューネリー石鹸と
ニューネリーシルクの服



綺麗になったけど
服はいままで通りの
安物を羽織っているの

お金が貯まったら
シルクでのオシャレな服を
プレゼントしてあげたい

そして
そのときに――



まだナイショだ
恥ずかしいし

何より
驚かせたい

そういうわけで
しばらくニューネリーに
滞在したいんだけど
どうかな……？

……うん

私もそれで
いいよ

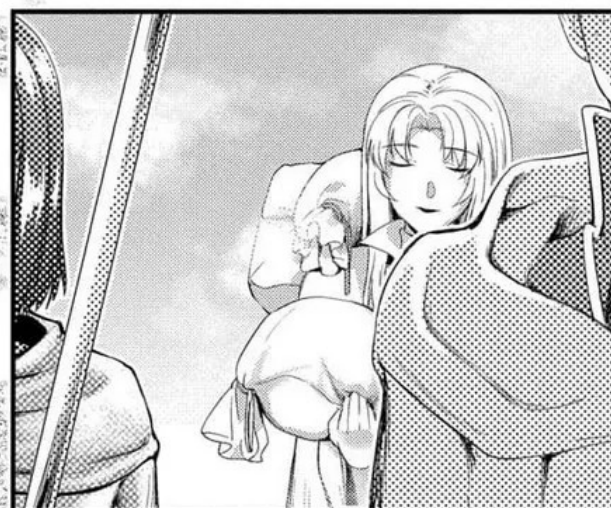
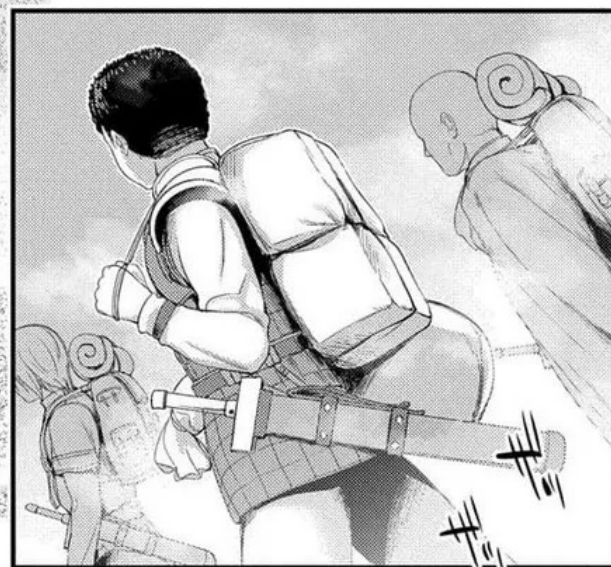
どこからでも

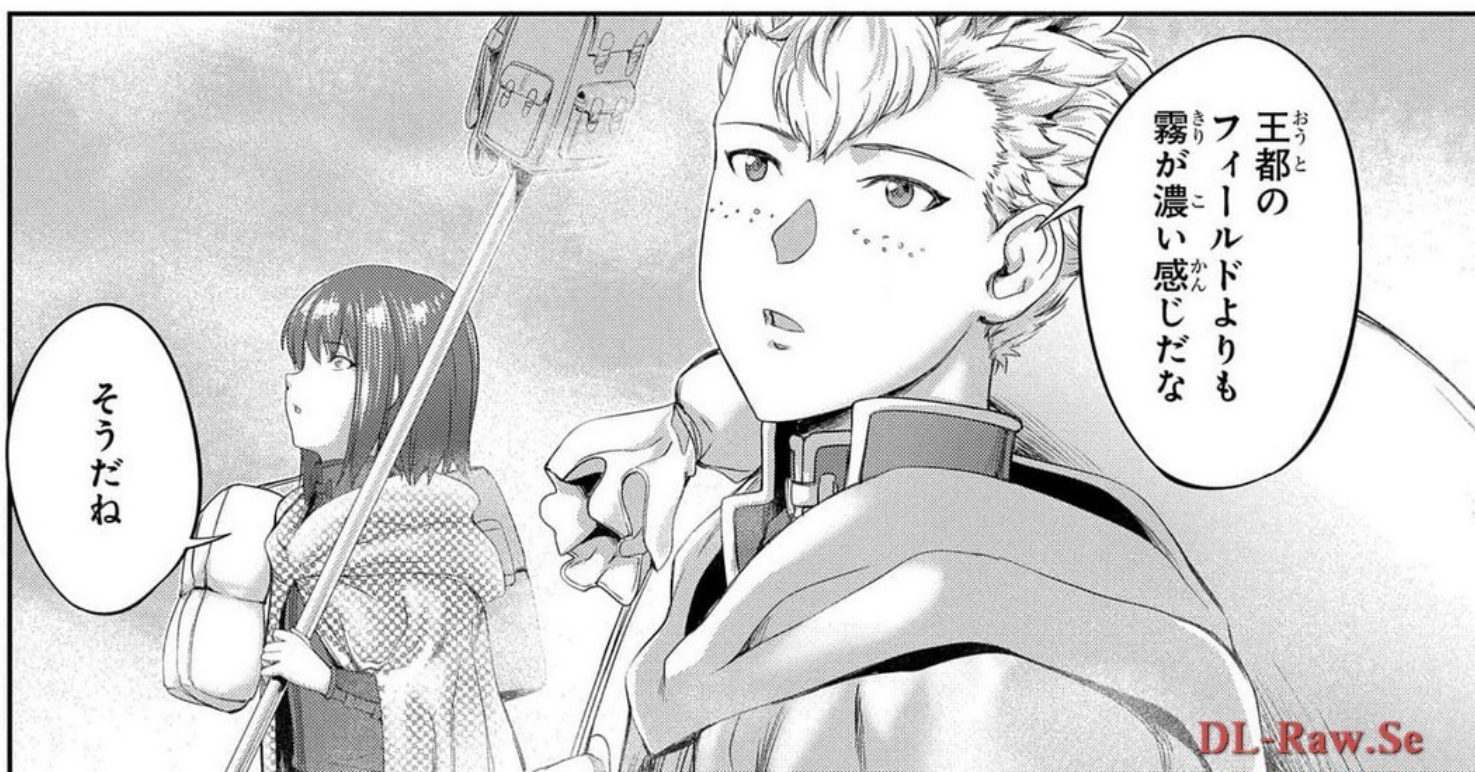
明確な
出入り口はないよ

——で

どこから入れば
いいんだ？







慣れないせいか
ディアナ達の歩みが
いまいち遅い

いつしか
二人と4人に
分かれていた

魔獣は奥地のほうが
遭遇する確率が高いので
こんな入り口付近にいても
仕方がない

今回はフィールド内を
一回りして
様子を見るんだ

早く行こう









侯爵嫡男好色物語

～異世界ハーレム英雄戦記～



情報に
あつた奴だ

鈍重だが溶解液に
気をつけろ！

俺とルペッタが
魔法で先制する！

わかった！

俺達は
弱ったところを

身体強化して
一気に攻める！

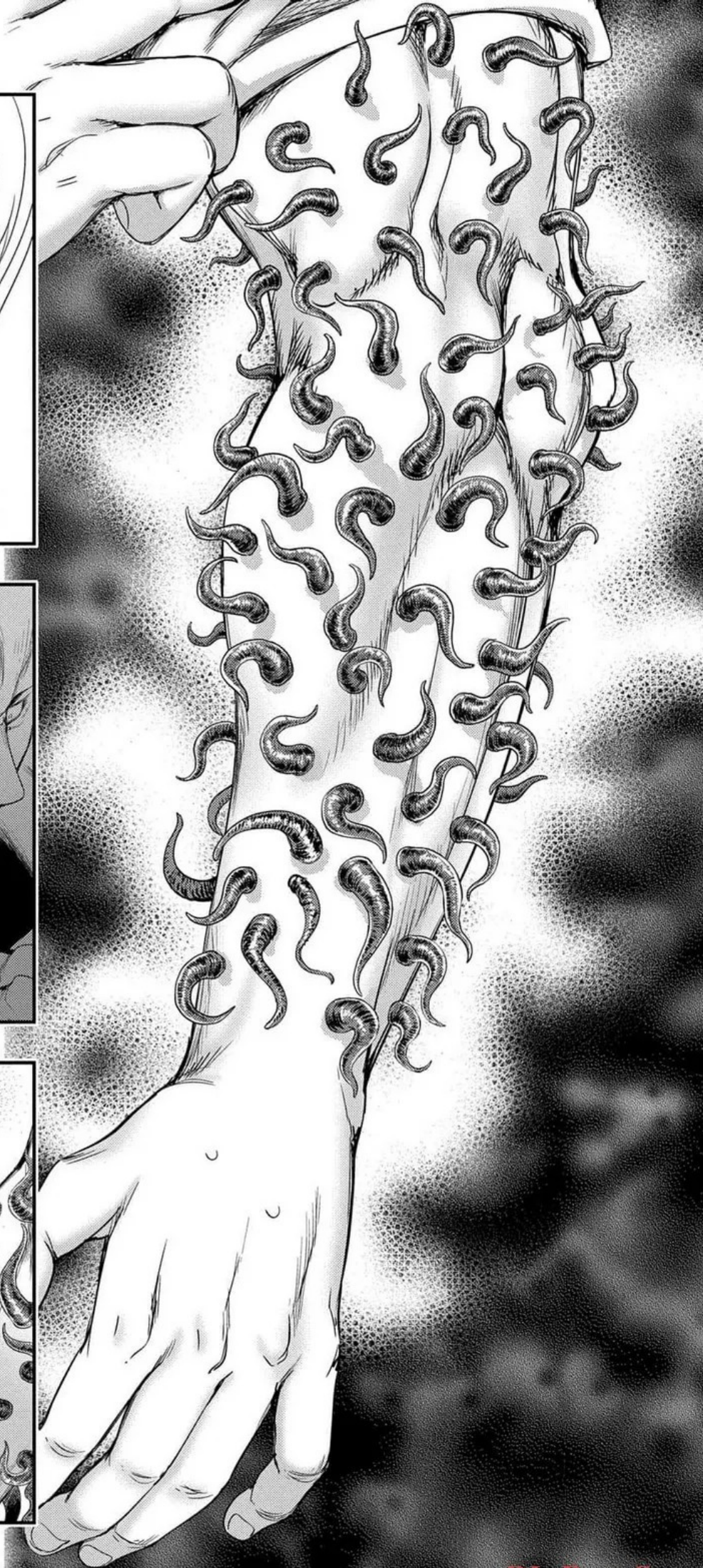
それでいい

ルペッタ！

うん！









なあんだ
ヒルじゃないか

なんだよその
タンパクな反応!!

と
取ってくれよ!

くそっ
やま
なんで山でも森でも
ないのにヒルなんか
いるんだ!!?

おい
無理やり
取るな!

ち
血だらけに
なるぞ!



かる
軽くでいいから
魔力解放してみろ

ヒルは魔力が
にがて
苦手なんだ
と
すぐに取れる

おっ
ほんとう
本当だ





もつと簡単なのは
常に薄く魔力解放を
することかな

だから
俺とルペッタには
ヒルが付かない

はい
入る前に
教えてくれよ

すまない
知っているものと
ばかり……

ちなみに不思議なことに
フィールドの外に出ると
ヒルは溶けるように
消えてしまう

ん
この鉄の杭は
軍が埋めたもので

ええと
現在地は……

杭に刻まれた記号と
地図を照合すれば
だいたいの場所がわかる

まだまだ奥地へは
かかりそうだな
……

それから数日^{すうじつ}

適度^{てきど}に魔獣^{まじゅう}を狩^かりつつ
フィールド内部^{ないぶ}を散策^{さんさく}し
さしたるトラブルもなく
順調^{じゅんちょう}に冒険^{ぼうけん}が続き――

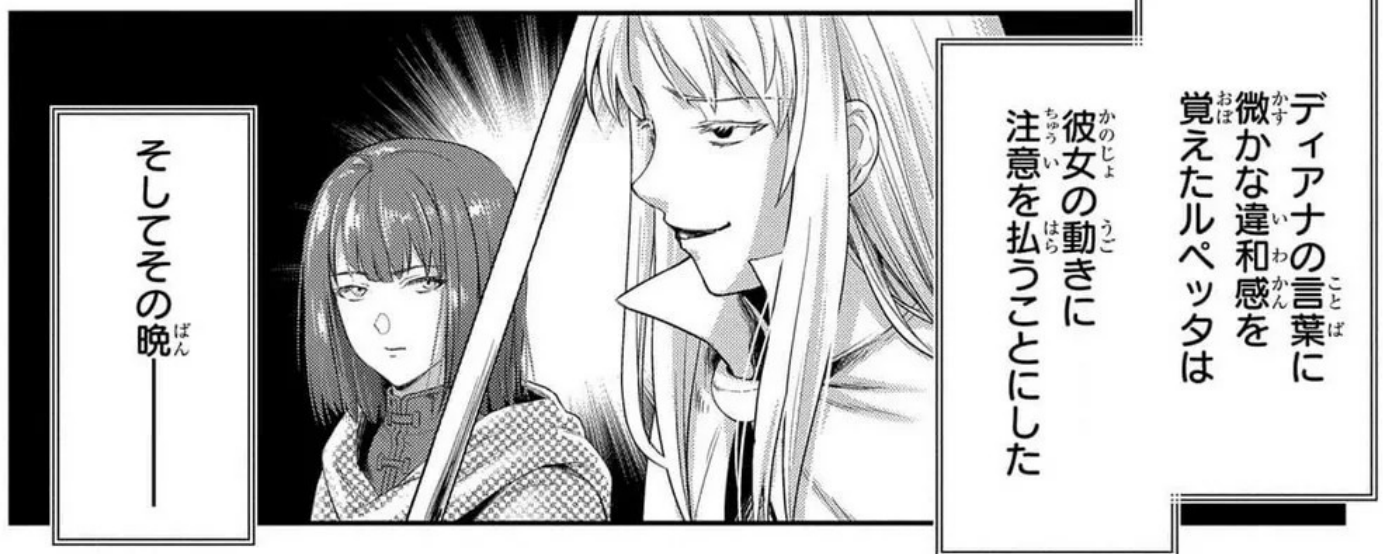
奥地^{おくち}の
岩塩地帯^{がんえんちたい}に
足を踏み入れた

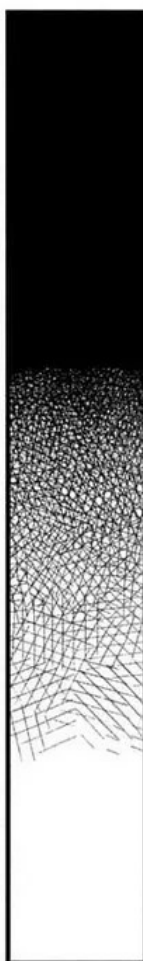
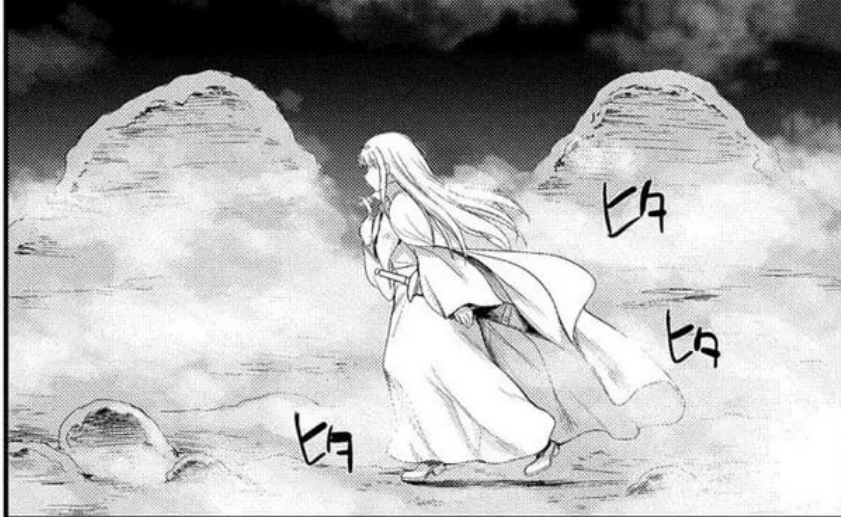
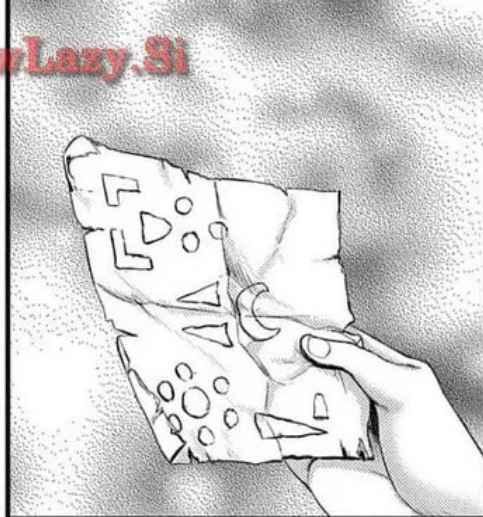
すごい！

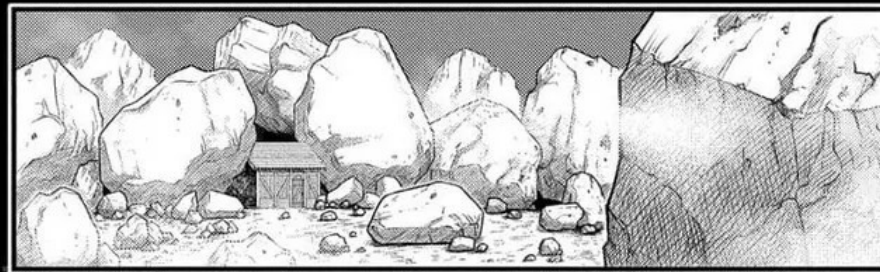
うわあ

これ全部^{ぜんぶ}
岩塩^{がんえん}なの……













……うんうんうん……

もっと詳しく……

……ああ……









メルギン!



やめろ
ディアナ!

なんでこんな
ことをする!?

もんぺんむよう
問答無用
かよっ

ならぼっ

大きな音

カッ

カッ



ディアナ!!







ディアナ

楽しそ^{たの}うだね





あふ
危ない
ルペッタ!!









そんなの
ぜったい
絶対に嫌っ!!

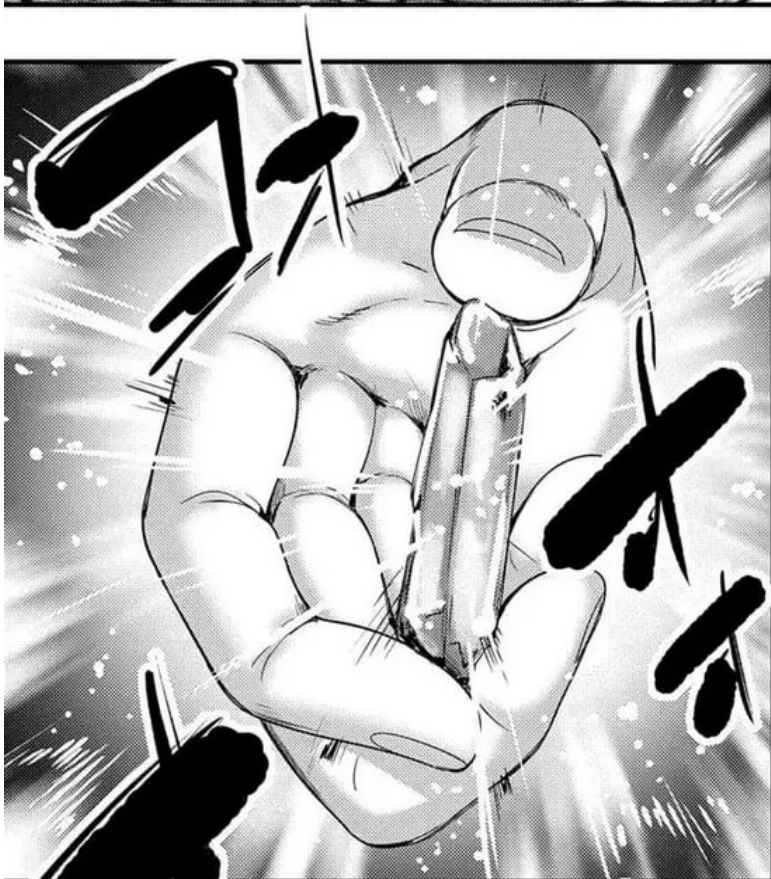
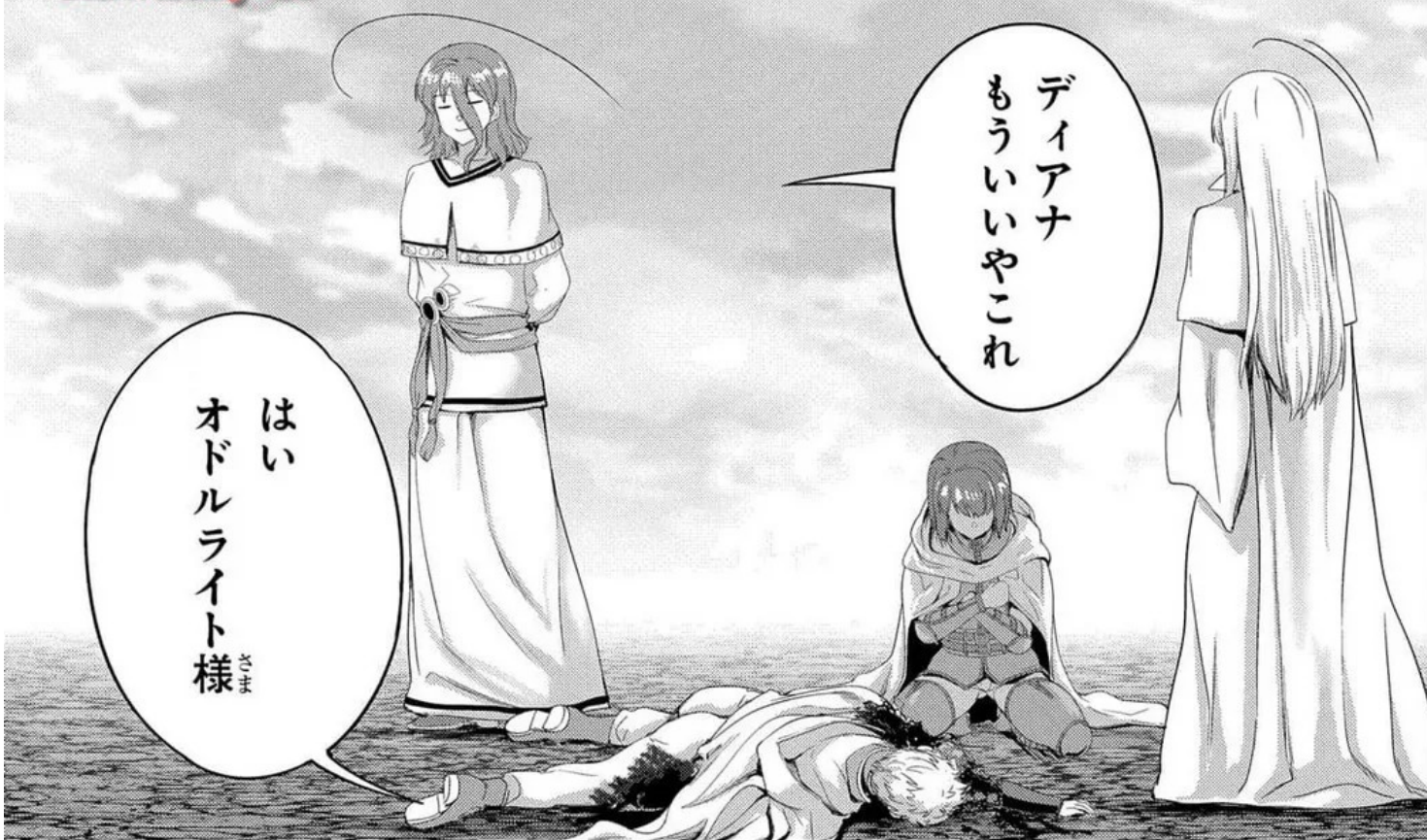
ア...

ぎゅっ
ぎゅっ
ぎゅっ

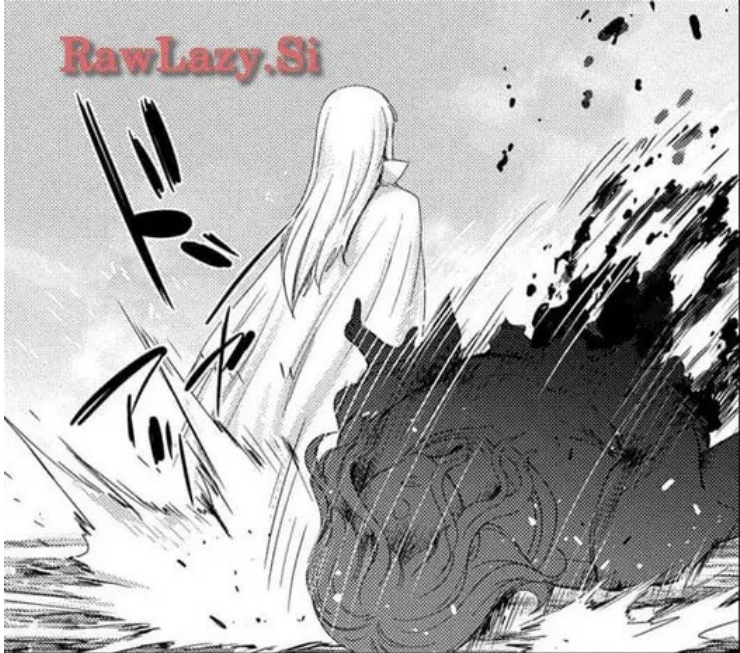
力が
—!!

力が欲しい……

……力が











—それから

メルギンの^{てあ}手当てを
しようとした

…しました

でも薬も道具も
手持ちでは
足りなくて……

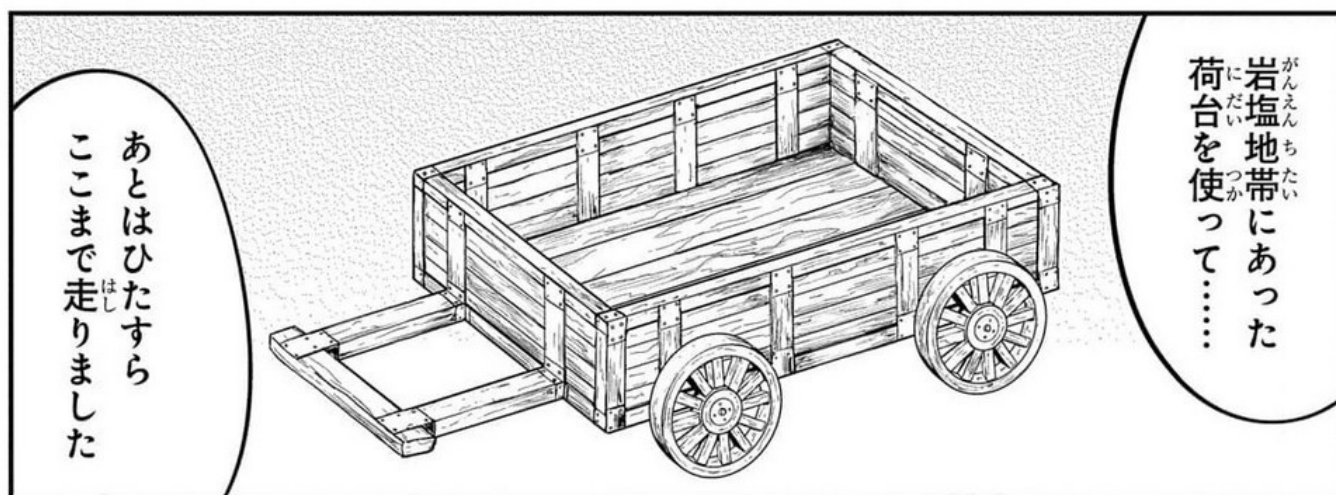


あかちゃんも
見捨てては
おけないから

幸いなことに
治療道具があつたので
それを使いました



小屋のことを
思い出したんです
何かないかなと



岩塩地帯にあつた
荷台を使って……

あとはひたすら
ここまで走りました



若様
少しよろしい
でしょうか？

ああ



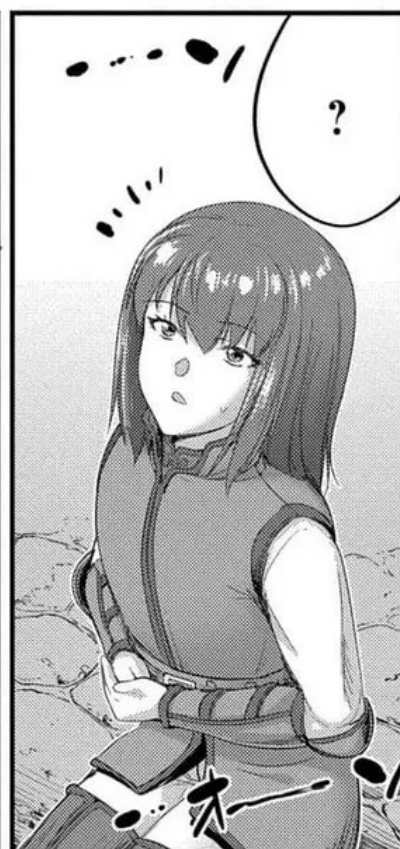
——それで岩塩泥棒
扱いされたと

なるほど

大体の流れは
わかった







ゴッ——

これは——

ゴッ——



わかってる

そっちへ
行ったぞ

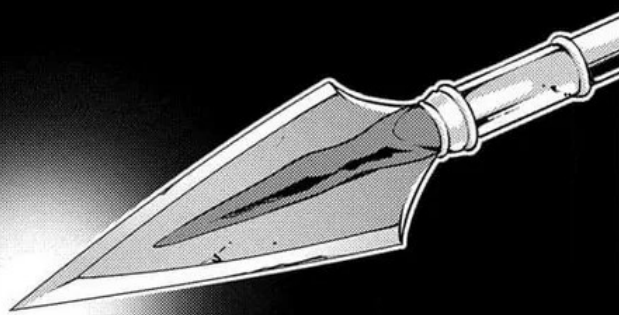
よっと!



銀の武器

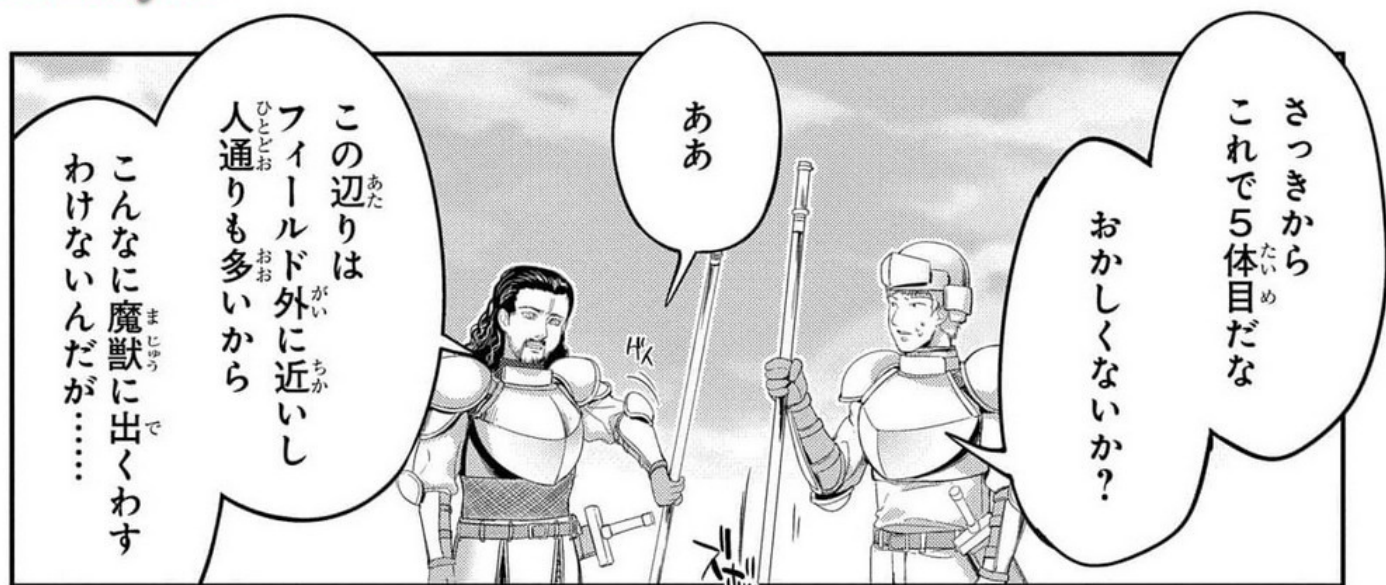
銀は魔獣が内包する
妖力を非常によく通す
性質を持つため

武器として刺すことで
妖力を外部に放出させ
弱らせることができる



よし
仕留めた







裏を返せば成熟には
気が遠くなるほどの
年月がかかるわけだ

数百年とか
そういう単位でな

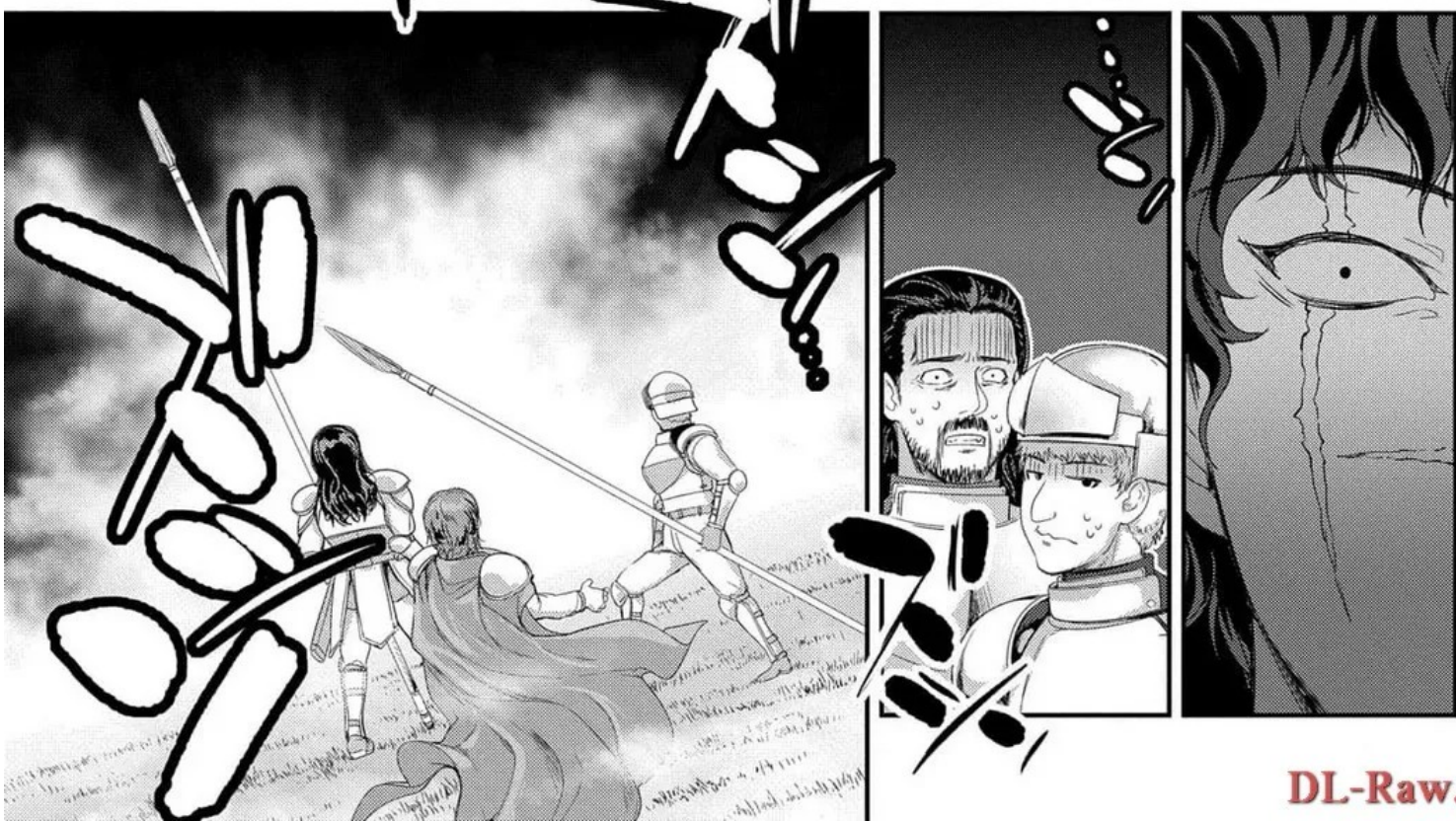
しかも普段から
冒険者の力も借りて
未成熟のうちに
間引いている

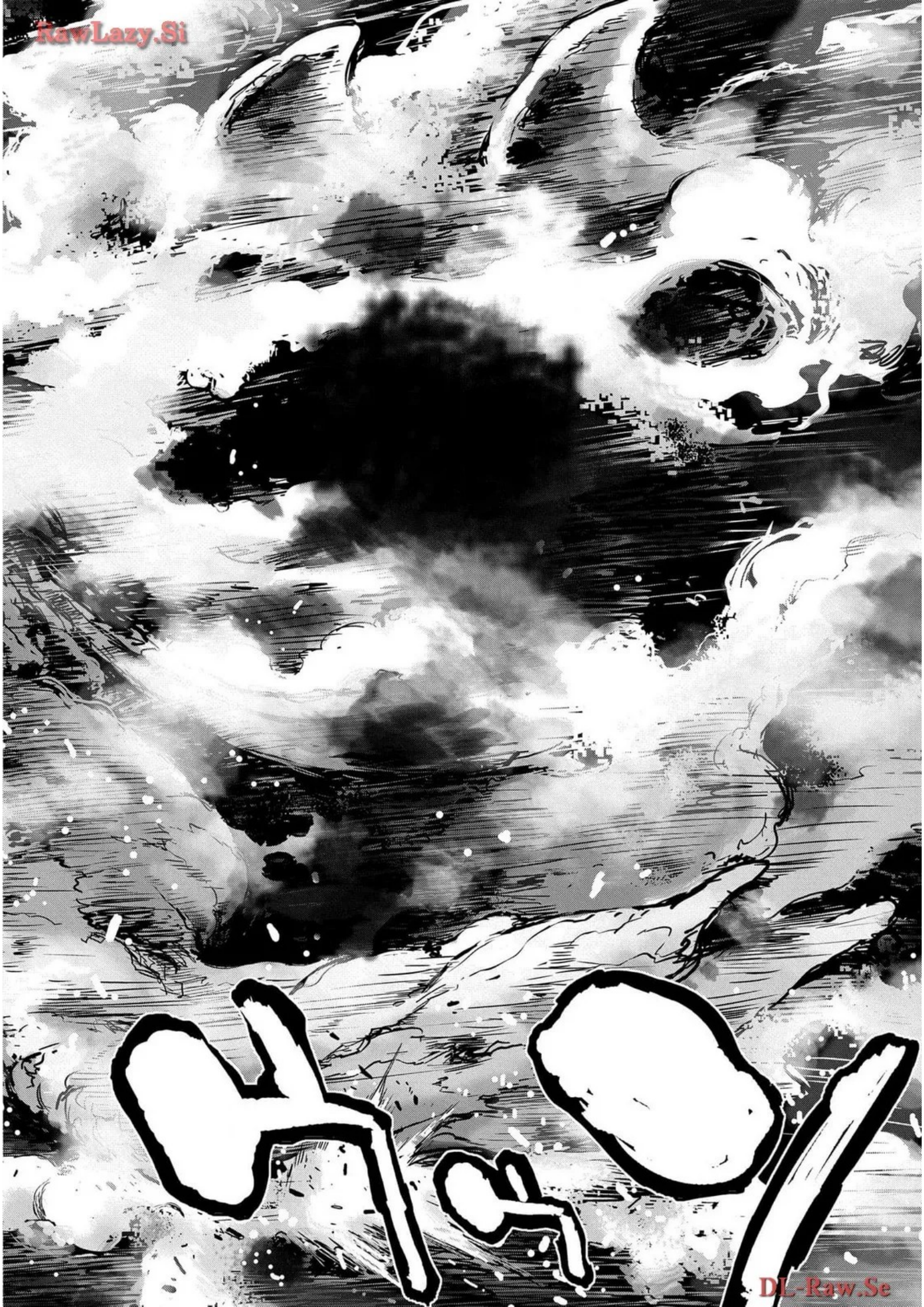


要するに

俺達が生きている間に
このフィールドから
成熟魔獣が誕生する
なんてことは

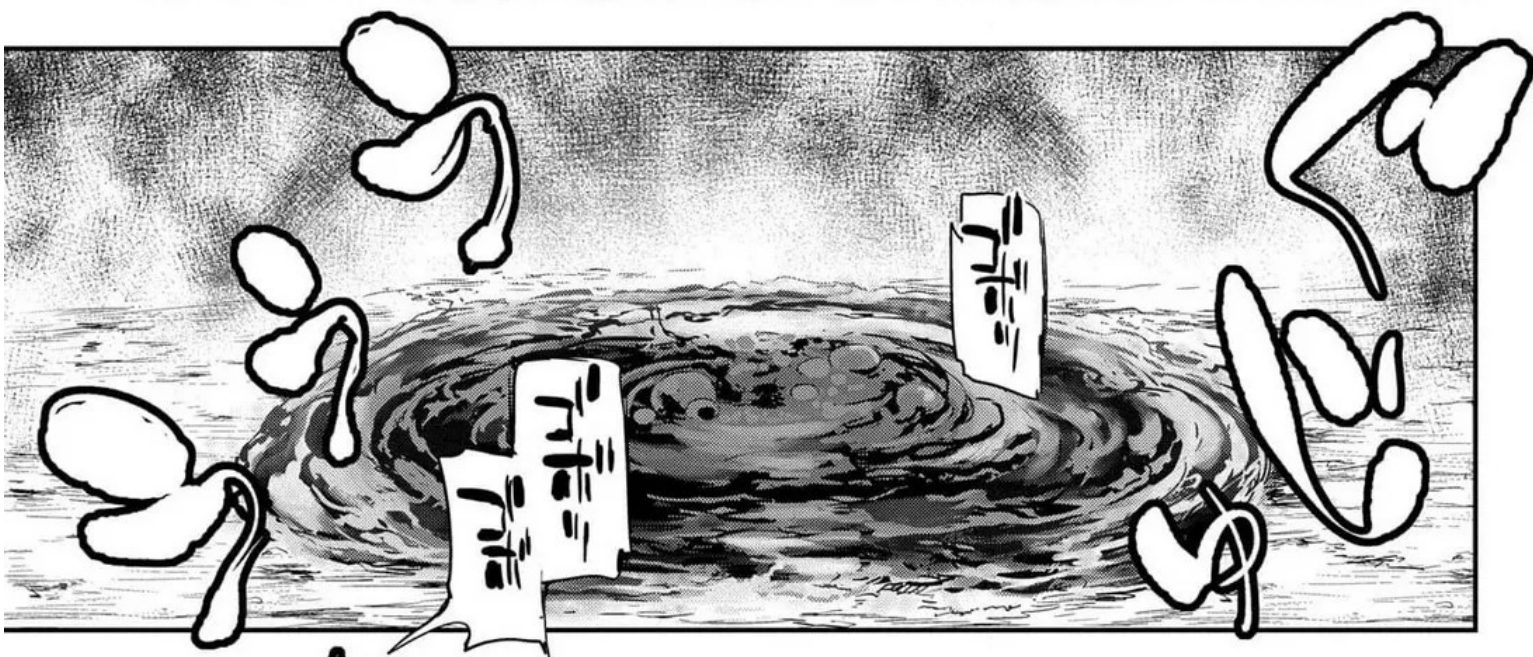
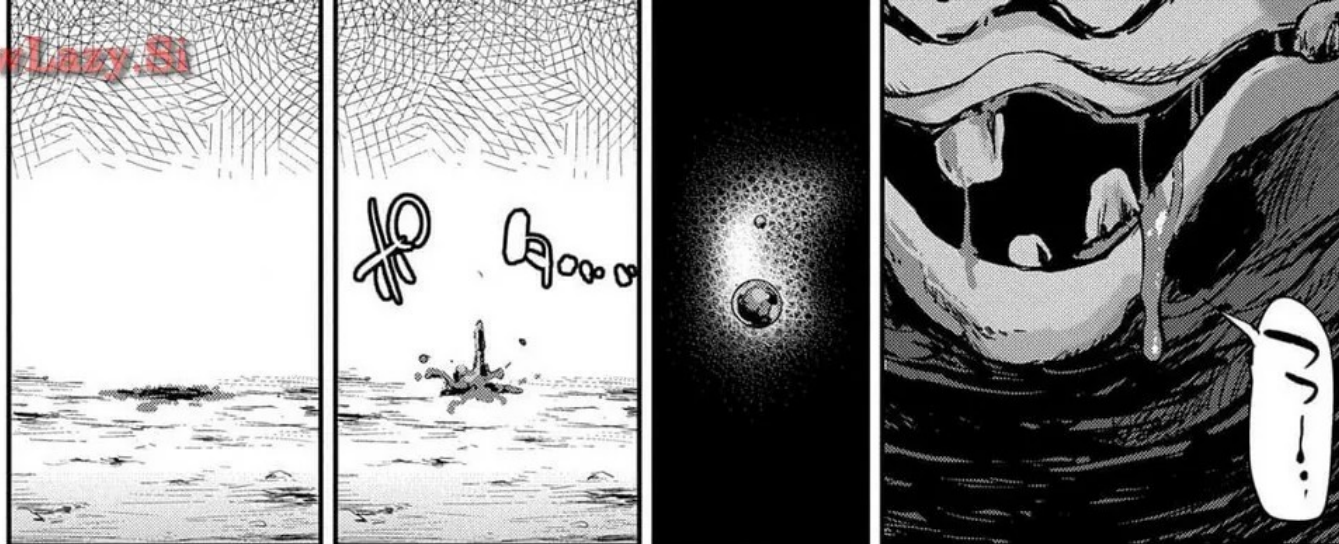
絶対に



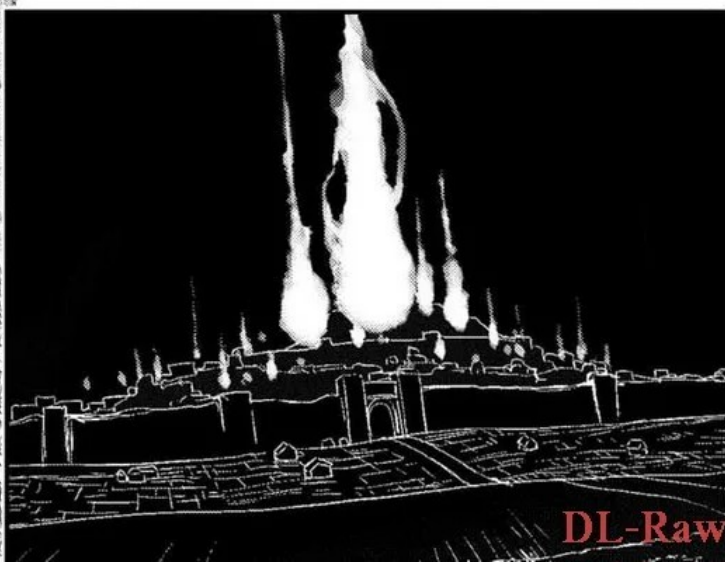
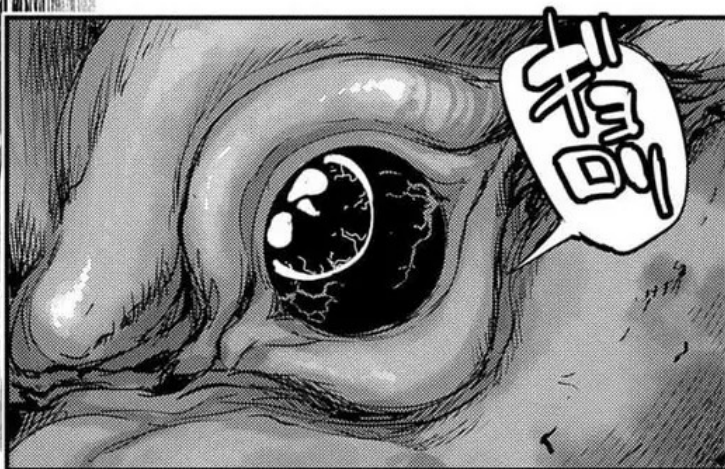




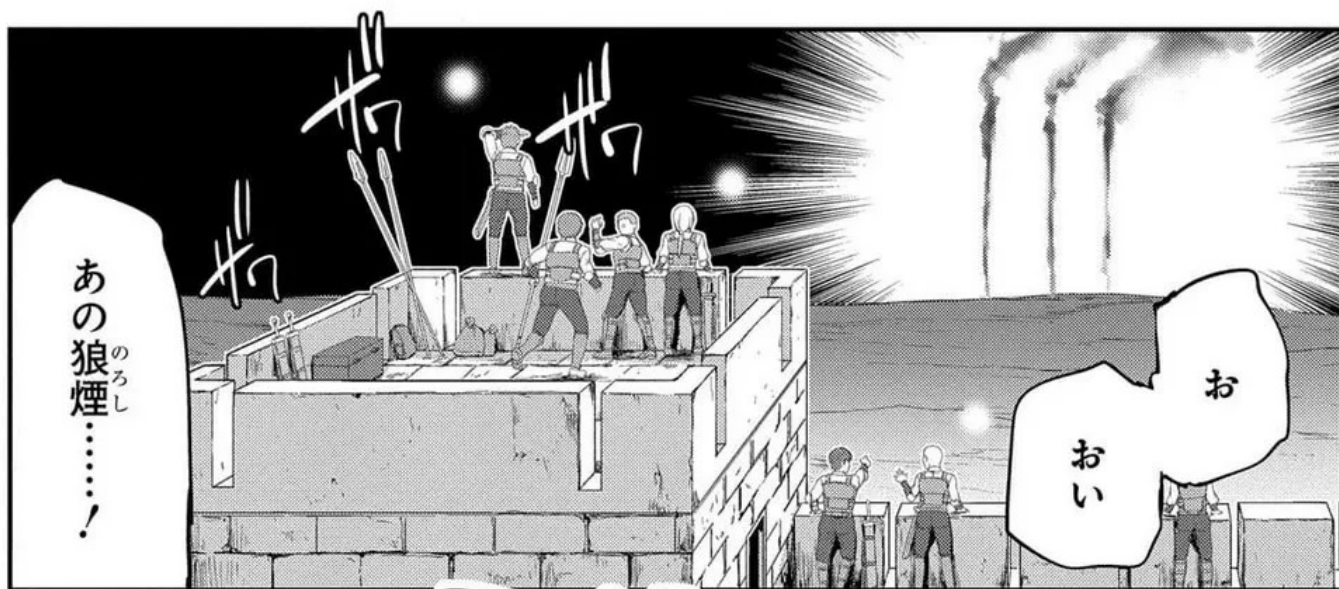
















侯爵嫡男好色物語 
～ 異世界ハーレム英雄戦記～





どんな精霊なの？

人の子が
大人になったときを
鐘を鳴らして告げる

子孫繁栄のためだい
精霊ですよ
オドルライト



へえ？

僕大人に
なったんだ？

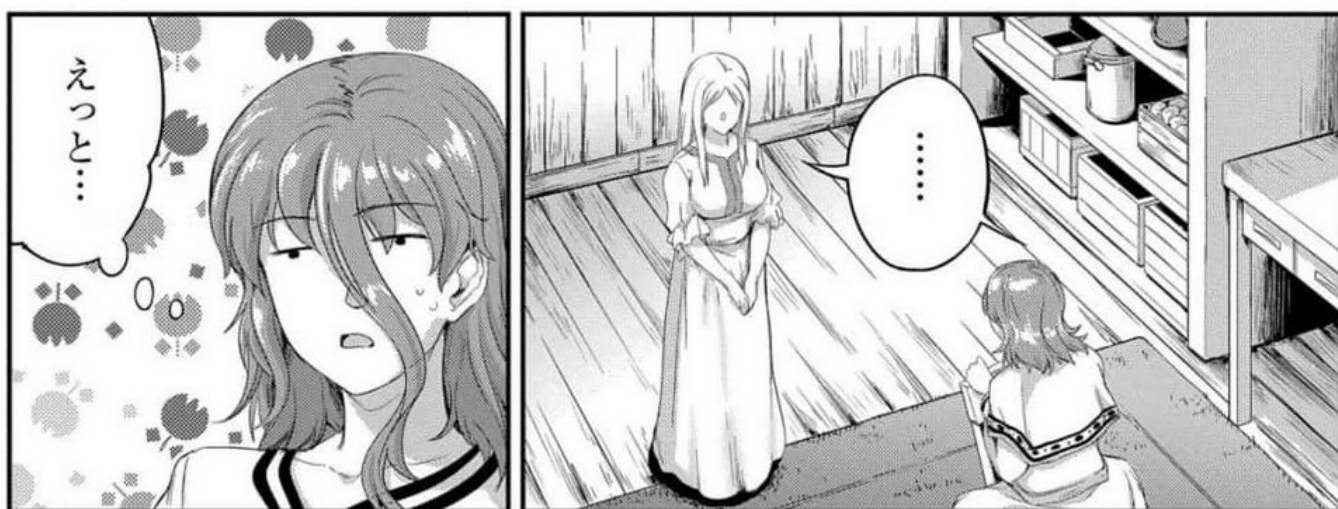
それで

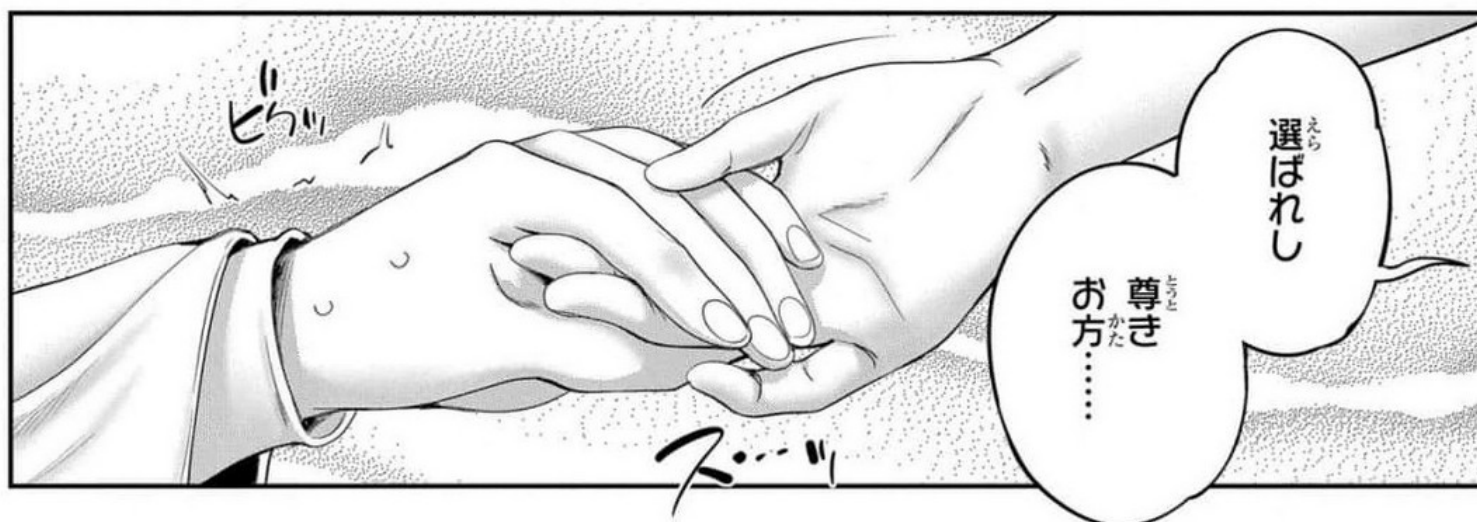
その人だれ？

敬虔な教徒だが
迫害されて
しまっただけ

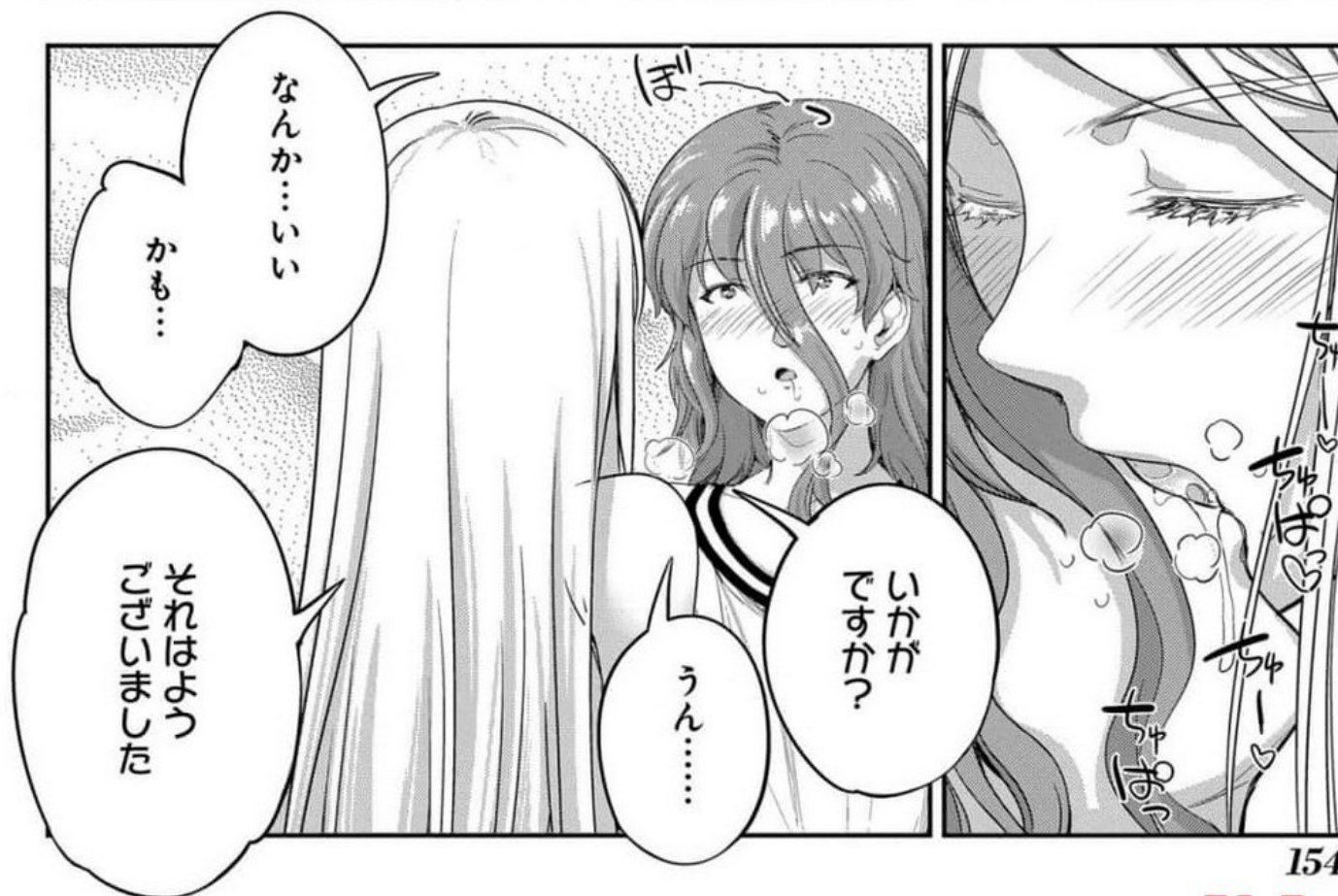
ここに匿いつつ
あなたの身の回りの
お世話をさせようと
連れてきたのだ

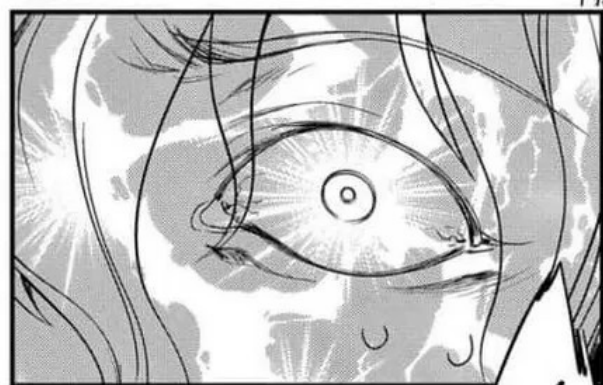
ふうん……？



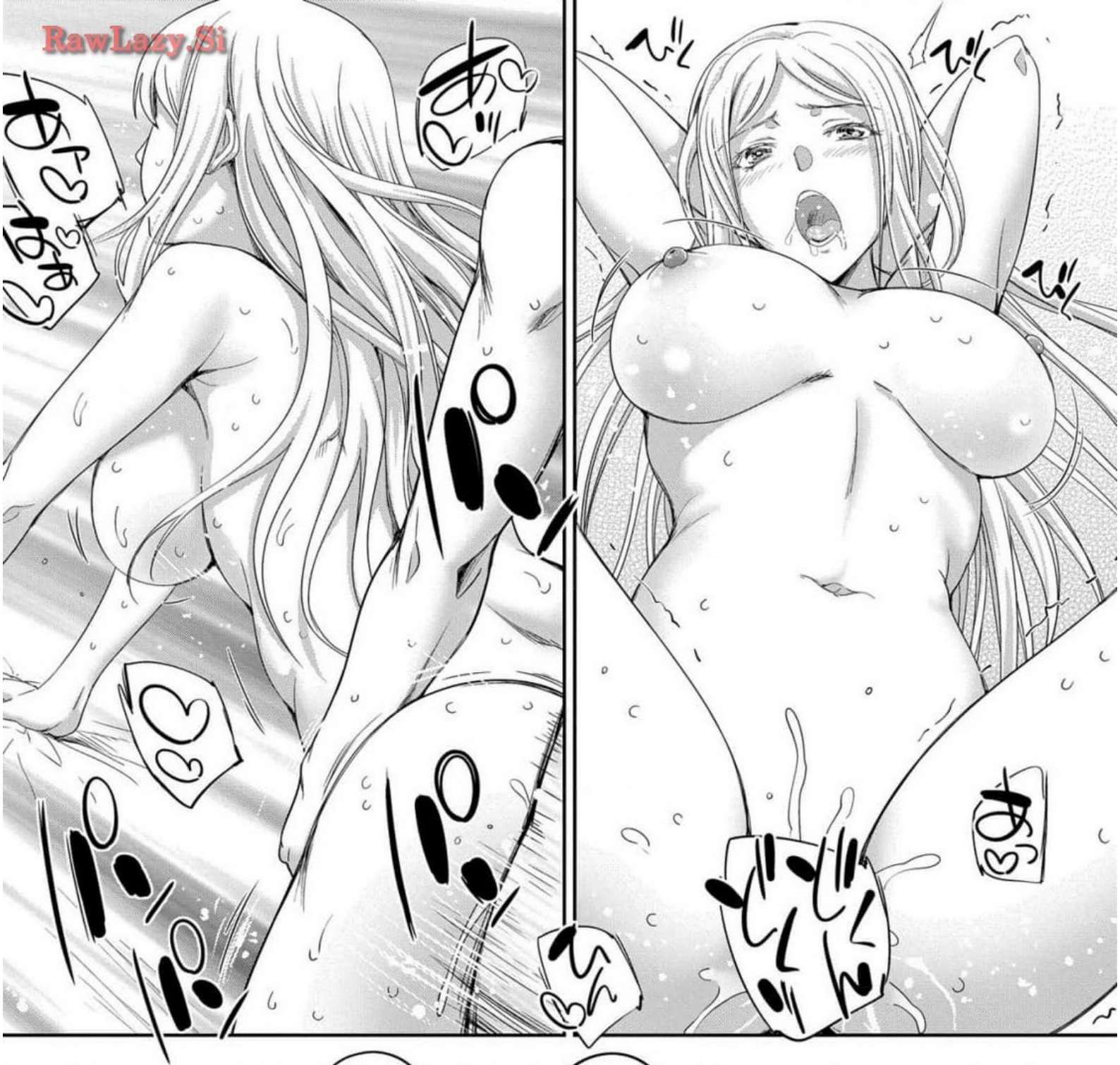












カリカリ

1
か
月
後
げつご

あ
き
こ
う
か
い
ち
や
う
教
会
長

み
て
よ
こ
れ





いいえ
わたくしがっ



素晴らしい

実に素晴らしい!!

これならば従祖を増やし
貴族に対抗できる戦力が
作れるはずだ!



そして
いずれは……

貴族どもの
圧政を……

ふふふ……





侯爵嫡男好色物語
～異世界ハーレム英雄戦記～



コミカライズ記念書き下ろし短編小説



フィールドワーカー(民)



世の常は禍界より生ず、ということわざがある。

エルオ大陸に生きる人々にとつて各地に存在する禍界フィールドは良くも悪くも特別な存在だ。そのためか、ことわざや慣用句に用いられることも多い。

フィールドの霧は地形を歪ゆがめ、気候を捻ねじ曲げ、環境を周囲とは異なるものに塗り替えていく。極寒の雪原に位置するフィールドへ一歩足を踏み入れるとそこには常夏の世界が広がっていた、そんな話も特段珍しいことではない。

そしてその変質した世界からは有用な資源が採取できることがあった。銅、錫すず、鉄など実用的な金属をはじめ、金や銀といった貴金属の発見例もある。また、資源とは何も鉱物に限った話ではなく、例えば淡水が豊富なフィールドから生活用水を得ている地域もあれば、一年中雪に覆われたフィールドから氷を運び出して氷室を作り、それを生業としている村もあった。

そこだけを聞けばフィールドとはさぞ便利で素晴らしいものに思えるかもしれない。ところが、そう手放して歓迎することはできない。フィールドは魔獣災害の発生源にもなるからだ。

フィールドの霧から生まれた魔獣は、魔獣同士の殺し合いを経て力を蓄え、やがて外界へと進出する。そして大地を手当たり次第に汚染し、人々に襲いかかるのだ。

魔獣の強さはピンキリだが、未熟な個体であれば人類に対する殺意マシマシの虎や熊ほどの脅威

であることが多く、気合と根性さえあれば武装した隸祖の平民だけでも対処できる。もちろん従祖がいなければ討伐できないような個体が出現することもあるが、酷い場合でもフィールド周辺の集落が一つか二つ消滅する程度で済むだろう。

だが、成長限界に到達したいわば完全体の個体、成熟魔獣のもたらす被害は計り知れないものになる。集落がどうこうのレベルを超え、地域や地方といった単位で災厄が降りかかりかねないのだ。滅多に出現することはないものの、それまで得た利益を一発で吹き飛ばすほどのインパクトになると言っても過言ではない。

良いものも悪いものもフィールドから生まれる。自分たちはその恩恵を受けて生きている一方で、その凶悪な災禍に巻き込まれて死んでいくこともある。世の中の出来事は表裏一体であり、人知の及ぶものでなく、幸も不幸も同じ場所から生まれるものだ。人生は幸運ばかり、不運ばかりが起きることはない。世の常は禍界より生ず、この言葉にはそのような意味があった。

何か不幸に見舞われた人がいたら「あまりくよくよするなよ。世の常は禍界より生ずとも言うだろう。そのうちいいことがあるさ」などと励ます時に用いられたりする。日本の言葉で似たものがあるとするば、禍福は糾^{あさな}える縄の如しといったところだろうか。

ともあれ、エルオ大陸の人々は古来よりフィールドと共に生きてきた。人の意思にかかわらず災禍は発生するのだから、せめてそこから得られる恩恵はしっかり享受しておこうと考えたのかもしれない。フィールドの近くに多くの人が集まり都市として発展する例は多い。クオルデンツェ家の本拠地ニューネリー市もその一つだった。

そんなニューネリー市の住人の一人である中年男性は今、一つの悩みを抱えていた。

「また、他所よその冒険者が問題を起こしたらしい」

それは都市を訪れる冒険者が引き起こす各種トラブルである。彼は部屋に呼び出した人物をじろりと見つめた。

「ハティ。なぜここに呼ばれたのかはわかるかな？」

そう問われた少女は腰に両手を当て、わけがわからないと言わんばかりの表情を返した。

「ギルド長の考えてることなんて知らないし。あたし、まだ何もしてないよ」

その返事に彼、ギルド長は「はあ」と深い溜息ためいきをついた。

ニューネリー市には塩ギルドと呼ばれる組織が存在した。その名称から塩の卸売に携わる組合のように思えるかもしれないが、実情は全く異なる。都市の南に広がるニューネリーフィールドに入って資源を採取する者、その資源を加工業者や卸売業者に販売する者、そういったフィールド鉱業とでも言うべき産業に従事する労働者の集まりが、ニューネリー市の塩ギルドなのである。

なお名称こそ異なるものの、有用な資源が得られるフィールドに隣接する都市にはだいたい似たような組織が存在する。貴族領主が管理する官製ギルドも多いが、平民が運営する民間団体の場合もある。

ちなみに、塩ギルドは民間団体ではあるもののニューネリーフィールドで組織的に資源を採取、販売する特権をクオルデンツェ家から与えられた既得権益団体であった。

「まだ何もしていない……か。呼び出された理由をよく理解しているようで何よりだ。毎度毎度喧嘩けんかばかりしやがって。俺は市のお偉いさんに謝罪に行くためにギルド長やってるわけじゃねえんだよ」

ハティはその塩ギルドに所属する人間である。彼女はニューネリー生まれニューネリー育ちの生粋のニューネリーっ子であり、他所から訪れた冒険者とはこれまでに何度か衝突している。ギルド長が今回彼女を呼び出したのは、改めて喧嘩禁止を伝えるためであった。

そんな呆れた^{あき}ようなギルド長の物言いにハティは思わずむっとする。

「でもでも、ギルド長さあ、肝拾いの連中にデカイ顔させていいの？」

ハティの言う肝拾いとは、冒険者を指す俗称の一つである。フィールドに入って魔獣を討伐し、その死骸を解体して魔石を採取していることからそうのように呼ばれることもあった。なんとなく侮蔑的なニュアンスを感じる字面ではあるが、冒険者自らそう称することも珍しくない。

「放っておいたらうちの人間だってナメられるし」

塩ギルドの労働者と冒険者、どちらもフィールドに入ることです計を立てる人間である。そのためだろう、敵愾心^{てきがい}というほど強い感情ではないものの「あっちには負けない」と張り合う気持ちを持つ者は少なくない。

「……まあ、ナメられるわけにはいかないが」

そしてそれはギルド長もたいして変わらなかった。

塩ギルドの歴史は非常に長い。そもそも論として、大昔の人々がニューネリーフィールドで岩塩を採取するために拠点を作り、それが長い年月をかけて発展した結果が現在のニューネリー市なのだ。塩ギルドの前身となる組織は都市の創生と共に誕生したと考えた方が自然だろう。

もつとも、記録らしい記録はほとんど残されてはいない。その時代ごとに存在していた「ニューネリーフィールドでの資源採取に従事する者たちの集団」が塩ギルドを名乗ってきたのであり、同

一の組織が脈々と続いたわけではないからだ。途中で解散したり、再編したり、いくつかの集団が手を組んで統合したり、あるいは時の領主の命令で別の組織に吸収されたりと、紆余曲折を経て今に繋がっている。塩ギルドという看板、概念だけが継続している状態とも言える。

いずれにしろ、塩ギルドはいにしえの時代から続く最古参のギルドであるとニューネリー市民からは認識されている。

「だがな、うちは伝統あるギルドだ。新参の冒険者とは違うってことを覚えておけ。あまり粗暴な真似をされても困る」

一方で、冒険者は比較的新しい職業と見做されていた。これはニューネリー市やクオルデンツェ領に限った話ではなく、大陸全土でほぼ共通している。

冒険者という存在そのものは大昔から存在していたが、きちんとした職業として認知されるようになったのはせいぜいここ二〇〇年ほどの話なのだ。

「だって礼儀のわかってない奴が多すぎなんだもん。こっちは迷惑かけられている側なんだけど？」

そしてハティは伝統あるギルドの構成員だからこそ、ニューネリーフィールド内の秩序を保つ責任があると考えていた。

「軍の指導が甘いんだよね。ギルド長からも言っておいてよ」

土地によっては民間の冒険者ギルドが存在することもあるがニューネリー市には存在しない。冒険者の扱いに関してはクオルデンツェ軍の管轄になっていた。

「軍部も何もしていないわけではないんだろうが、近頃は流れてくる人間の数も多くてな……」
これまでもニューネリー市を訪れる旅の冒険者はいたのだが、ここ最近は特に増えていた。

「まー、確かに王都から来たっての多いよね。もともとルデンコスタを拠点にしてた人もいるみたいだし」

別にハティは他所者と見るや即座に噛みつく狂犬気質の人間というわけではない。むしろ素行に問題のない旅の冒険者とは積極的交流をして遠方の情報を得るなど、どちらかといえば社交的であつた。そのため昨今の冒険者^{かいわい}界限の事情についてもある程度は精通している。

「……ああ、王都の政策の影響だ」

およそ二年前に発生した魔獣災害、エルシニアの禍^{わざわい}によってレヴィオス王家はその威信を大きく傷つけられた。レヴィオス領に位置するルデンコスタフィールド、現在ではレヴィオスフィールドとも呼ばれるフィールドから爆誕した魔獣エルシニアが、史上稀^{まれ}に見る規模の被害を引き起こしてしまったからだ。

基本的に魔獣災害はある意味では天災のようなものであり、発生元となった土地の領主を強く非難できるかという微妙なところだ。普段からフィールド管理に無頓着であつたり、有事の際に魔獣討伐の意思を見せなかつたり、わざと他領に魔獣を追い払つたり、そういった責任放棄に近いような対応さえしなければ「まあ、仕方ないよね。ドンマイ」と許す風潮がある。

ところがエルシニアの禍はかつてない大災害になってしまった。特に魔獣エルシニアの撒き散らした奇病は大陸各地に甚大な被害をもたらした。隸祖はともかく、主祖や従祖の死者だけを考えれば史上最悪の数になる。

強靱^{きようじん}な肉体を有する貴族や騎士は本来病気になる。そのため病死という最期は全くの想定外の不幸であり、それだけに遺族のショックも大きなものになる。そしてその行き場のない悲しみと

怒りはレヴィオス家に向いてしまったのだ。

「大変なんだろうが、あまり場当たりのことをしないでもらいたいもんだな」

エルシニアの禍以降、レヴィオス家はフィールド管理に力を入れるようになる。これまでの慣例で考えれば「我らはやるべきことはやった。文句があるなら魔獣エルシニアに言え。お前の領地でお前の家族が死んだのはお前の力不足だ」と黙殺しても問題なかった。だが、未曾有の災厄に対しそのような態度を示せば恨みを買うばかりでなく、貴族として隙を見せる事態に繋がりがねないと判断したのだろう。

冒険者の優遇政策を打ち出したのもその一環である。後の祭りでしかない取り組みだが、これはあくまでも他家の貴族向けの政治的なパフォーマンスに過ぎなかった。そのため平民側の事情というものは考慮されていない。結果として、大陸各地で活動していた実力ある冒険者が利を求めて王都レヴィオスを目指すことになったのだ。

「そのせいで人が集まりすぎたんだって。今じゃろくに肝も拾えないって聞いたよ」

結果としてレヴィオスフィールドは冒険者で溢あふれてしまい、あまり稼げる場所ではなくなってしまう。当たり前だが、儲もつからない場所にいつまでも長居をするほど彼らも暇ではない。同じレヴィオス王国であり、王国領内でも上位の面積を誇るニューネリーフィールドに移動を始める者が現れたのは自然な流れであった。

そして実力のある者ほど見切りをつけるのも早い。ギルド長の悩みの種はまさにそのあたりにあった。実力ある冒険者というものは従祖であることが珍しくないからだ。

「これからしばらくはニューネリーを訪れる冒険者は増えるだろう。やっかいなことだな」

貴族に仕える騎士など、エルオ大陸に生きる従祖は支配階級に属することが多いが民間にも少なからず存在した。自由な生き方に憧れて騎士家を飛び出した子や、貴族男性の火遊びに付き合わされた村娘が産んだ子などがそれに該当する。

「従祖は面倒なんだよね。あくが強いのが多いし」

まるで他人事のような口調のハティをギルド長が軽く睨む^{にら}。

「ああ、そうだな。あくが強い奴ばかりだ。お前を筆頭にな」

ハティもまた従祖の肉体をもって生まれた人間である。ただし、騎士家出身でもなければ、母親が貴族の愛人というわけでもない。彼女は従祖の血を保つ平民の家系に生まれたのだ。

科学技術が未発達なエルオ大陸において、魔法という超常の力を駆使できる従祖は非常に有用だ。農業のような第一次産業はもちろん、鍛冶など強い火力を必要とする製造業や、魔法で強化した馬車を使った運送業、野盗や魔獣といった脅威から村落を警護するサービス業まで、幅広い活躍が期待できる。

そのため、民間側としては騎士階級から降りてきた、あるいは落ちてきた従祖の血をどうにかして次の世代に残したいと考える。だが、従祖が従祖を産むには、従祖の男女で子を成す以外に方法はない。そこで村や町といった共同体が総力を尽くして似たような境遇にある在野の従祖を探し出し、お見合いをセッティングするのだ。首尾よく事が進むと、主祖に仕えていない従祖の家系というイレギュラーな存在が平民の世界に誕生することになる。

なぜこれがイレギュラーなのかと言うと、エルオ大陸では「主祖あってこそその従祖」という考え方が常識であるからだ。従祖だけで勝手に血を繋いでいる状態はとても不安定で、言うなれば「一

時的に存在している」と見做される傾向にあった。そしてその認識はたとえ数百年にわたって存続してきたという実績があっても変わらない。

そのような背景があるため、公的には平民の家庭と同様の扱いとなる。例えばハティの生家は元を辿れば過去に存在した騎士家の末裔まつえいにあたるが、現在は家名を名乗ることはできない。家名を持つことは支配階級に属する者の特権であり、平民には許されていないからだ。

「頼むからこの間みたいな喧嘩は勘弁してくれ」

「あれ、あたしのせいじゃないもん」

つい先日、ハティは大きなトラブルを起こしている。ニューネリー市郊外をたむろし、通行人にちょっかいを出していたゴロツキまがいの従祖冒険者と口論になり、双方がヒートアップして一触即発の事態にまで発展してしまったのだ。

「それに騎士様からもそんなに怒られなかったし」

主祖ほどでないにしろ、従祖もまた人間兵器のようなものだ。従祖同士が本気で対決したらそれはもはや喧嘩というより殺し合い、戦闘と表現した方が的確である。

「あのなあ、そもそも騎士様から呼び出しを食らう時点で大問題なんだぞ……」

塩ギルドに所属する従祖構成員と、他所者の従祖冒険者が、ニューネリー市からすぐ近くの街道で戦闘を開始しようとしている……もうこの時点で都市の安全保障に関わってくるレベルの事件になる。

この時はクオルデンツェ軍から従祖武官が大慌てで駆けつけその場を収めたが、後日、クオルデンツェ騎士の名でギルド長とハティに出頭命令が下され、騒動を起こしたことに對する釈明をする

羽目になったのだ。

「善悪を決めるのは俺たちじゃない。騎士様や大守様は簡単に俺たちの首を刎^はねることができるんだ。それを忘れるな」

こちちが正しい場合でも領主側はそれを無視して処罰することができる、ギルド長はそう語気を強めて戒める。

「はいはい」

しかし、ハティはほとんど耳を傾けようとしなかった。彼女はそんなことになるとは全く考えていなかったからだ。

領主側からすると平民従祖の領民は少し面倒なところがある。領内の発展に寄与してくれる一方で、取り扱いを誤れば危険な敵になりかねないからだ。特に他領から移住してきた平民従祖はハイリスク・ハイリターンと言えるだろう。

その点、領内出身の平民従祖はローリスク・ハイリターンの人材だ。優秀な労働力として活躍してくれる上、戦争等で戦力が必要になった時に地元を守る志願兵として手を挙げてくれるかもしれない。また、隸祖の親族や友人などが領内に何人もいるため、いざという時に人質を取りやすいという部分も都合が良かった。

ハティはニューネリー市で生まれた従祖のため、領主であるクオルデンツェ側はその出生から血縁、交友関係までばっちり把握している。素性のよくわからない他所者の従祖冒険者より遥かに価値のある人材と言っているだろう。

そのためハティの言い分が正しい場合はもちろん、仮に正しくなかったとしてもクオルデンツェ

家は彼女に肩入れした裁定を下す可能性が高かった。このあたりはエルオ大陸の封建的な人治主義が露骨に現れる部分だ。白いものを黒と言える領主の権限は、むしろ地元民のハティにとってプラスに働きやすい。

そして彼女もそのあたりの機微をなんとなく察していた。少なくとも「ニューネリー市にとって有害である」とさえ判断されなければ領主側は自分の味方をしてくれるだろうと。

「ハティ。少し真面目に聞け」

いつもの調子ではぐらかされてしまうことを懸念し、ギルド長は声のボリュームを一段階引き上げて続ける。

「昨日、市内で騒動を起こした旅の冒険者がいただろう。聞くところによると、あれは六人組の従祖だったらしい」

ルペッタたちが市内を呑気^{のんき}にぞろぞろと連れ立って歩いていたことは、市内ではちよつとしたニュースになっていた。

「え、何それ。六人全員が従祖ってこと？」

「そうだ。安易に喧嘩を吹っ掛けるような真似はするなよ」

「それはしないって。その前に馴染^{なじ}みに声をかけるよ」

ハティの言う馴染みとは、日頃から交友関係にある市内在住の平民従祖のことである。つまり彼女の言わんとするところは「六人の従祖冒険者を相手に単独で喧嘩するほどバカじゃない、ちゃんと従祖の仲間を集めてから喧嘩する」ということだ。ギルド長は今度こそ頭を抱えなくなった。

「絶対にやめろ」

六人組の従祖冒険者と対峙^{たいじ}することを考えれば、最低でも六人は従祖が欲しいところだ。そしてハティは市内で顔が利く。その程度の数ならさほど苦勞することなく集めることが可能だろう。

最低でも計一二人からなる従祖同士の激突、それはエルオ大陸の基準では個人間の戦闘とは呼べない。控えめに言っても戦争だ。

さすがに都市近辺で戦争を始めたともなれば、いくら地元出身の平民従祖であっても然るべき罰が与えられるだろう。それを許してしまうとさすがに領主側のメンツに関わるからだ。

「あは。冗談だって、冗談。さすがにそこまでやったらまずいことくらいわかってるし」

悪ふざけたような笑みを見せるハティであったが、ギルド長には全く笑えない冗談であった。
「……頼むぞ、本当に」

何かあったらギルドに相談しろ、それが無理なら軍に相談しろ、素行の悪い冒険者とは可能な限り関わるな、ギルド長は噛んで含めるように彼女に何度も何度も言い聞かせた。そしていい加減説教タイムが長引いてきたところでハティはわざとらしく首を動かして外を見る。

「ギルド長。そろそろ出なくていいの？ みんな待ってるよ」

軽く舌打ちをしてギルド長は話を打ち切り、ハティを連れて外に出た。

二人がいた建物は塩ギルドの出張所である。レンガ造りの長屋のような見た目をしており、周囲には合計四棟の木造倉庫が立ち並んでいた。

ニューネリーフィールドから目と鼻の先の距離にあるこの出張所は、塩ギルドで働く作業員のキャンプ地としての役割がある。作業員は夜明けと共にこの場所に集合して班を作り、フィールドに入っ

て資源採取を行うのである。

ギルド長は普段は市内の塩ギルド本部で仕事をしているが、最低でも週一回の頻度で出張所を訪れ、フィールド入りする前の作業員に対して朝礼のようなことをしていた。

この日はハティに口頭で注意するため出張所を訪れていたギルド長であったが、せっかく来たからには一言二言話をしておきたかった。ギルド長は仕事道具の手入れをしていた作業員たちを集めると、組織内の伝達事項や安全に関する諸注意などを口にしていく。

「……あー、それと最後に一つ周知がある。三日ほど前から冒険者の一団が遭難しているそうだ。

最近ここに来たばかりの素人さんだな。一五人中一四人は戻ったが、あと一人は今も戻っていない。もし中で発見した場合は保護を頼む」

フィールドでの行動は原則として自己責任なところがある。ギルド長としては塩ギルドの作業員が行方不明になれば搜索隊を結成するが、外部の人間のためにそこまでサービスする気もなかった。「以上だ。今日も怪我には気をつけるように」

朝礼が終わると作業員は各々フィールド入りの準備を再開する。

「おう、ハティ。今日は俺らと一緒にだ」

「こっちはいつでも出発できるぞ」

そう声をかけてきたのは、岩塩採取を担当する班の班長と副班長である。彼らはハティがギルド長から説教をされている間にフィールド入りの準備を終えていた。

「今日は岩塩班なんだ。じゃ、よろしく」

広大なニューネリーフィールドからはいくつかの資源を採取することができたが、その中で最も

需要があるのは、やはり塩ギルドの名の由来にもなった岩塩である。ニューネリーフィールドと言えば岩塩と言うくらいには知名度も高い。そのため他の班に比べると人員も多かった。

この日、岩塩班に割り当てられた荷車の数は一九台である。一台につき三人の作業員が付くため、合計五七人の作業員がその場に待機していた。ここに統括として班長と副班長、そして従祖のハティが入ることになる。

「荷車一九、人員六〇。これから出発する」

「うす、確認します」

班長の声に従って出張所で記録係を務める人間が荷車と作業員の数を手際よく確認していく。これはフィールドに入る前後で必ず行っている作業であった。

フィールド仕事は兎にも角にも事故が多い。日本風に表現すると「危険・汚い・危険・きつい・危険」の5K労働と言っても過言ではなく、うっかりするとすぐに人が死ぬ現場だ。

そしてそのことを一番理解しているのが塩ギルドの作業員である。朝礼や現場入りする人員のチェック、フィールド内における単独行動の禁止など、命を守るためのルールがしっかり作られるようになったのは自然な流れかもしれない。

「数、把握です。今日もよろしくお願いします」

「おうっ、行ってくるぜ」

班長を先頭に、副班長を後尾にして岩塩班の一団が出張所を後にする。ニューネリーフィールドまでは距離にして一〇〇メートルもなく、一団は歩き慣れた小道を進んでいく。

「……ふう」

さあいよいよニューネリーフィールドに入るぞ、そんなタイミングでハティは小さく息を吐いた。
「なんだ、今も慣れてねえのか」

「だって気持ち悪いもん」

霧の内側は別世界と言っているほどに環境が変化している。人間が住む世界とフィールドの世界、その境界に踏み込む瞬間に覚える違和感を彼女は苦手としていた。中に入ってしまったばすぐに気にならなくなるのだが、ほんの少し緊張する部分がある。

もともと、それは仕事に影響が出るほどではない。地球の話に例えるなら、何度も飛行機に乗っているのに離陸の瞬間の浮遊感が苦手でついつい拳を固く握ってしまうビジネスマンのようなものだろう。つまりはその程度ということだ。

「それに今日も濃いみたいだし」

ニューネリーフィールドに入ったハティは落ち着き払った様子で周囲を見渡し、そう感想を告げた。

「確かにな」

フィールド内部に立ち込める霧は濃い日もあれば薄い日もある。ほぼ毎日のようにフィールド入りをしているハティと班長は「一〇段階評価で一年の平均が五なら今日は七くらいの濃度」と判断した。

当たり前前の話ではあるが濃ければそれだけ視界が悪くなるため事故が起きやすい。塩ギルドの作業員からすると霧が濃くていいことなど何もないのだ。

「おい！ 皆聞けえ！ 見ての通り今日も霧が濃い！ 三人一組での行動を徹底しろ！」

班長は両手を大きく掲げて作業員たちの注目を集めると、怒鳴り声かと思うほどのボリュームで注意喚起をする。塩ギルドの人間は班長に限らず大声で話す癖がついている者が多かった。

「……こりゃケツまで声は届いてねえな」

フィールドの霧は音を伝えにくくする性質もあつた。霧が濃いほどその性質が強く現れやすいが、あくまでも傾向だ。例外もある。

極端な話になるが、一メートル先も見えないような濃い霧に包まれても問題なく音が聞こえることもあれば、比較的薄い霧しか出ていないのに数メートル先にいる人の声が聞こえないこともある。班長は大声で呼びかけを試みたが、最後尾にいるはずの副班長から応答はなかった。霧によって白く霞^{かす}んでいるためその姿は見えないが、距離にすれば五〇メートル程度でありフィールドの外であれば間違いなく届いたはずだ。

「……一四番かな？」

魔法で聴覚を強化したハティが呟^{つぶや}く。すると間もなく、隊列の後方から伝言ゲームのように報告がやってきた。内容は前から一四番目に位置していた荷車の作業員が「自分のところまではギリギリだけど班長の声が聞こえた」というものである。

誰かが大声を出してどの程度音を伝えられるか測定する手法は作業員の間ではメジャーだ。そのため確認作業も手慣れたものだった。

「この濃さで一四番までなら問題はないか」

「だね」

二人はそれを濃度に見合った遮音レベルであると結論づける。

一番怖いのは、想定よりも遮音性能が高い霧がいつの間にか自分たちの周囲に広がっていたというパターンだ。うっかり仲間とはぐれて未知のエリアに迷い込んだが最後、助けを求めても誰にも声が届かずそのまま遭難してしまう。従祖のハティであれば力技で状況を打開できるかもしれないが、隸祖の作業員は最悪命を落とす結末に繋がってしまうのだ。

「今日の作業は問題ないな。進むぞ」

この日の霧は特別に危険なものではないと班長は判断する。彼の指示に従い岩塩班は再び足を動かし始めた。

岩塩が採取できるエリアはニューネリーフィールドの深部にあたる。他所から来た冒険者であれば到達までに何日も要するが、塩ギルドの作業員は慣れと長年のノウハウがあるため半日もかからない。岩塩班の団は最短距離を効率的にきびきびと進んでいく。

「行方不明の冒険者はこの霧の中を彷徨さまよっているのかねえ」

移動中も警戒は必要だが雑談をする余裕くらいはある。班長は朝礼でギルド長が話していた遭難中の冒険者を話題に出した。

「もう死んでるんじゃない？ ギルド長は素人さんって言ってたし」

従祖ならともかく隸祖の冒険者で三日も遭難したら生存はかなり絶望的だ。無策に動き回って衰弱死することはもちろん、注意散漫になったところを魔獣にパクリとやられてしまう可能性もある。「そうだよなあ。俺らだって地図なしで普段行かねえところに迷い込んだら無事に帰れるかどうか……」

塩ギルドの作業員はニューネリーフィールドに慣れているが、全てのエリアに詳しいわけではないな

い。普段から作業をしている資源の採集場所とその周辺、そこへ向かうまでの道筋ならばまず迷うことはないが、それ以外の場所から単独で無事に帰れるかどうかは五分五分といったところだ。

ニューネリーフィールド専門の熟練の冒険者ならば全エリアの歩き方を知っているかもしれないが、そこから外れた場合は戻ることに苦勞することになるだろう。既知のルートを頼りに動いているという点では塩ギルドの人間とさほど変わらない。

「随分気にしてるんだね」

「……ま、俺は若い頃にここで遭難したことがあるからな。助かったのは班の連中とはぐれて二日目だった」

「へえ。初耳」

「もう何十年前も前の話だ」

ハティが興味津々になっていることを察したのだろう、班長はそのまま話を続けることにした。

「あの日のフィールドは特に何も変わったところもなかった。それでいつも通りに作業をしていたんだが、いきなり凄まじく濃い霧が流れ込んできてなあ……そのままあたり一面真っ白だ」

酷い時にはすぐ隣にいるはずの仲間さえ見えなくなるほど濃い霧が広がることもある。こうなった場合、霧が消えるまでその場で待機するよう塩ギルドでは指導していた。下手をすると足元さえ見えなくなってしまうため、闇雲に動くとは全く知らない場所に迷い込んでしまう可能性が高いからだ。

「動いたらまずいつてわかってはいたんだが、いつまで待っても霧が引きやしねえ。それで俺は怖くなっちゃった」

たった一人で何時間も音もない真っ白な霧の中で待っているというのは、想像するよりも遥かに難しい。若い頃の班長はその不安と恐怖に耐えきれず、近くにいたはずの仲間を求めてその場を動いてしまったのだという。

「それでどうなったの？」

「気がついたら全然知らねえ場所にいた。霧もほとんど晴れなくてな……」

フィールド内は自然界では考えられないような変異を起こしているため、ほんの少し離れただけで周囲の見た目や雰囲気さがらりと変わることもある。「このあたりの地形はあの場所に似ているからこっちに進めばいいのかな」などという考えは全く当てにできないのだ。

「あの頃の俺は作業現場以外の標しるべの位置も知らなかったし、読み方も覚えていなかった。もう何もかもが手詰まりだった……」

ニューネリーフィールドには標と呼ばれる金属製の杭くいが存在した。これは内部の地図を作るために打ち込まれたものであり、杭に書き込まれた記号を読めば現在フィールドのどのエリアにいるかおおよその位置くらいは判断することができる。知識のある者であれば、という注釈が付くが。

ただし、濃い霧が広がっている時には標を探すことがまず難しい。当時の班長に標の知識があったとしても状況を好転させることができたかは微妙なところだろう。

「今でもたまに夢に見る……ここがどこかもわからねえ、どこに行けばいいかもわからねえ、少し休むと蛭ひるまみれ、歩いているうちにまた真っ白な霧が広がり始めて、すーっと音が消えていく。前もろくに見えねえし足音も聞こえねえから、自分がちゃんと歩けてるのかも段々わからなくなってくる。あんまりにも静かなもんだから逆に耳がキンキンして、そのうちにどこからか死んだ爺じいさ

んの声なんかが聞こえてきて……」

それはいつまでも無音の時間が続くことに対する恐怖、それに対抗するための防衛本能だったのかもしれない。精神が極度に摩耗していたことも関係しているのだろう、班長の耳にはいるはずのない人の話し声が聞こえたり、聞こえないはずの足音が聞こえたりするようになったという。

なお、このような体験を訴えるフィールド遭難者は決して少なくない。班長のように数日にわたって彷徨ったケースであれば尚更だ。ニューネリーフィールドに限らず、遭難者の幻聴や幻覚はよくある定番の体験談だった。

「あの時のことは思い出したくもねえな……」

最後に一度ぶると身を震わせ、班長は話を打ち切る。

「……うっし、着いたぞ」

そうこうしているうちに、岩塩班は目的地である岩塩の採取場へと到着した。ここは岩塩がゴロゴロと転がっているエリアであり、ここには塩ギルドの作業道具が収められた小屋なども設置されている。

「あれ？」

その異変に最初に気がついたのはハティであった。

「おいおいおい、小屋が開いてるじゃねえか！」

班長もそれに気がつき、苛立たしげに声を荒らげる。それは副班長も同じだった。

「またどつかのバカが勝手に使いやがったのか！ クソがよ！」

他所から来た冒険者が勝手に小屋を使ったり、岩塩を大量に持ち去ったりする事件がここ最近何

度も起きている。塩ギルドとしては岩塩を少しくらい持ち帰ることは黙認している……というよりは、あまりにも大量に存在するため禁止することができないと言った方が正しい。

だが、小屋に入られること、荷車を持ち出されること、自分たちの作業道具に手を出されることに關してはさすがに我慢がならなかった。

「ハティ！」

「わかつてるって！」

以心伝心とはまさにこのことである。ギルド長に慎重に行動するように言われた直後にもかかわらず、ハティは即座に腰に下げていた剣を抜く。犯人をしばき倒す、彼女の頭にあるのはそれだけだった。

荷車を担う作業員を残し、班長と副班長、そしてハティが小屋に近づく。

「……まだ、いるみたい」

小屋の中に人のいる気配を感じ、ハティはその場に待機するよう班長と副班長に無言で合図をする。隸祖相手ならば従祖のハティは絶対に負けることがない。隸祖の二人が中途半端に加勢する意味はなく、むしろ人質に取られるなど無駄なリスクが増えるだけである。

「ああ、頼むぞ」

大の男が女の子一人に修羅場を任せて引込めるかよ、などとは言わない。隸祖と従祖の力の差の前ではそのような強がりに何の意味もないことをエルオ大陸人は理解しているからだ。

班長と副班長がその場で立ち止まったことを確認すると、ハティは小屋に足を踏み入れた。

「誰が勝手に入っているの!? この小屋はうちのギルドの……え？」

彼女の予想に反してそこにいたのは人相の悪いゴロツキではなく、衰弱しきった隸祖の青年男性であった。

「……………た、助け……………て……………」

青年は床に横たわったまま動かない。自力で起き上がることができないほど弱っているのは誰の目にも明らかであった。

さすがにこの状況で見殺しにするほどハティは薄情ではない。彼女は剣を収めてすぐに班長と副班長を呼んだ。

「……………これはひでえな」

班長が青年を仰向けにしてそう呟く。

フィールドに入っているといつの間にか蛭のような生き物が体につく。そのためフィールド入りの隸祖の作業員は定期的に手で取り除いていた。だが、青年はそんなことをする気力すら失っているらしい。首筋に蛭らしきものがびっしりと隙間なく張り付き、グロテスクなマフラーのようになっている。

なお、エルオ大陸では一般に「蛭」と呼ばれているが、これは山や森などで見かけるヤマビルとは完全な別種であり、正式な名称は異なる。エルオ大陸の学者はこれを、まじもの 蠱物と呼ぶ。

「とりあえず蛭を取るよ」

蠱物の特徴の一つに人の魔力が苦手なことが挙げられる。ハティが軽く魔力を放出すると、青年に引っ付いていた蠱物はびっくりして吸血をやめ、口を離した。その後は手で撫なでるだけでポロポロと落ちていく。

「なあ、あんたもしかして三日前から遭難している冒険者か？ 一五人組の」

副班長が青年の服を脱がしながら尋ねた。蠱物が口を離したとはいえ、それまでずっと血を吸われていたのだから腕も背中も血まみれだ。

副班長はボロ布で血を拭き取りながら、服の隙間に挟まった大量の蠱物を取り除いていく。

「は……はい、そう……です……」

「辛いなら無理に喋^{しゃべ}らなくていい」

班長が気遣うが、青年が口を閉ざすことはなかった。

「……人に、会えて……良かった……ああ、生きてる……」

遭難した経験のある班長だけが青年の気持ちに共感することができた。霧の中を彷徨っているとにかく人が恋しくて仕方がなくなるのだ。散々歩き回った末に小屋を見つけ「ここなら人が来るかもしれない」と思わず駆け込んだと語る青年の言葉は真に迫るものがあつた。

副班長が水筒に入れた水を分け与えると、青年は遭難までの経緯についてぼつりぼつりと話し始める。

「……なるほど。こう言っちゃ悪いがよくある事故だな」

既知のルートから外れた場所に未発見の資源がないか、地図で詳しい情報が載ってないエリアに人間が簡単に狩れるタイプの魔獣がいないか、そんなスケベ心で探検を始めたところ少し濃い霧に包まれて来た道を見失い、そのまま遭難したのだという。経験が浅く無鉄砲な若手の冒険者にはありがちなケースであった。

「音が何も聞こえなくて……それで、どこからともなく……泣き声が……」

「泣き声？」

「ち……小さな子供……多分……あ、赤ちゃんの、泣き声だ。それも、一人じゃない……何人もの泣き声が、霧の向こうから……何度も、ずっと……」

フィールドという非日常な空間に響く赤子の声を想像し、ハティは薄気味悪いものを感じた。

「疲労から来る幻聴だろう。俺も経験があるからわかる」

一方の班長は落ち着いた様子で状況を分析する。

「あ、幻聴か」

「フィールドに赤ちゃんなんているわけねえだろうが。それを言ったら俺なんて死んだ爺さんに会ったことになるぞ」

ついさつきそんな話をしたばかりだったこともあり、ハティも副班長もその結論にすぐに納得した。

「それで班長さあ、この人はどうするの？」

「……まあ、ギルド長からは助けるように言われてるからな。何人か割り当てて先に帰す組を作るしかねえだろ。こっちの仕事が終わるまで待たせたら死んじまう」

班長は人員を再編し、このまま岩塩採取作業を始める組と、青年を連れて帰還する組を作ることにした。当然だが前者の方が人数は多く、後者の方が少ない。

「仕方ねえ、ハティは帰還組だ」

従祖のサポートがないと作業効率は悪くなるが、そこはやむを得ない。ハティがついてこないとなると作業員は帰還組に割り当てられることを嫌がるだろう。怪我人を連れて少数で帰還するこのミッションは危険度が高いからだ。

「あいよ、あたしが戻ればいいんだね」

ハティが了承したことを確認すると、班長は青年に声をかけた。

「お前さんの事情はわかった。これから外に帰してやるから、もう眠れ」

ほんの少し回復したとはいえ、とても歩ける状態には見えない。それならば荷車に乗せてしまうのが一番だ。そして荷車に乗るのであれば起きていようが寝ていようが関係ない。体力の消耗が最も少ない選択を選ぶべきだと班長は考えた。

「ゆっくり休んだら幻聴のことだつてすぐに気にならなくなるさ。ま、これに懲りたら安易に未踏の地を探ろうなんて思わないことだな」

「……はい……ありがとうございます……」

こうして青年は無事にニューネリーフィールドから帰還することに成功する。

しかし、彼の聞いた泣き声の正体に気がついた者は、この時一人もいなかった。



COMMENT

漫画版「侯爵嫡男好色物語」をご購入いただきありがとうございます。

原作のALです。

はや6巻。ありがたいことですね。

今回はフィールドに入るルベッタたちの話が多いです。

当時、原作本編でこの話をどうまとめるか試行錯誤して悩みまくったのを思い出しました。

せっくなので、おまけ小説はフィールドで働く平民隸祖の話にしてみました。

フィールド稼業でメシを食ってる平民のエピソードは何かしら書いてみたいとも思っていたので、色々書けて楽しかったです。

ともあれ、フィールドの中の様子などが描かれていて見ていて面白い巻になったなと思います。

次巻にもご期待ください。

それでは。

漫画版「侯爵嫡男好色物語」を今後ともどうぞよろしくお願いします。

AL



ポツと出のコミック版オリキャラに
濡れ場を奪われるとは……

私だって脱げば
けっこう凄いのよ？

見せられなくて
残念ねえ……

要望が多ければ
外伝・今明かされるディアナ
衝撃の過去！ご期待
あ……るはずありませんよね

そして亀吉との対決は
次巻へ持ち越し！
迫りくる災厄の権化!!
ニューネリーはどうなって
しまうんだー!!!

ご期待くださ〜い

Gen

MGC
Beat
SERIES

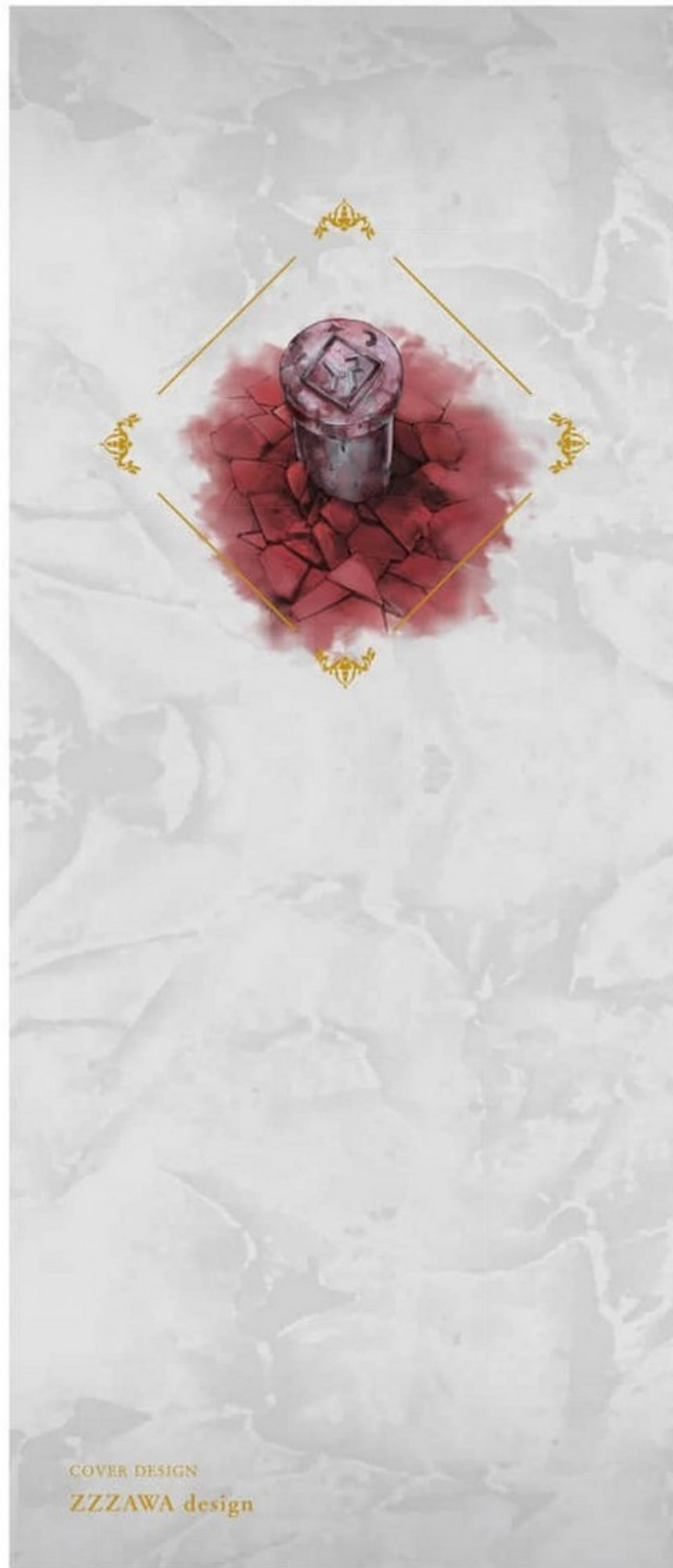
侯爵嫡男好色物語

異世界
ハーレム
英雄戦記

6

原作
AL
漫画
GEN

MAG
Garden



COVER DESIGN
ZZZAWA design





やってやって
やりまくる!?

主人公・ウィルクの
異世界ハーレム生活が始まる!!

ニコニコ漫画でも大好評連載中!!

毎週月曜日更新

「MAGCOMI」からお届けする
ファンタジー最前線

マカコミ
MAGCOMI
異世界出張所



seiga.nicovideo.jp/manga/official/magcomi_isekai/

侯爵嫡男好色物語

～ 異世界ハーレム英雄戦記～

原作 AL 漫画 GEN

6



プレミアムな「マンガ」のひとときを
マッグガーデン発 WEBマンガサイト

MAGCOMI
MAG Garden COMIC ONLINE マグコミ

5の倍数日更新 / マグコミで検索

magcomi.com



異世界 英雄、**宗教組織**による
大陸最大の**テロ活動**を防ぐー!!
今回も大幅加筆修正モリモリ♥

原作者・AL先生
書き下ろし
SSつき!

シリーズ累計
60万部
突破!!

クオルデンツェ・イルメスカ



当主就任時のイルメスカ

クオルデンツェ家第十三代当主。

十二代当主ジルザとその愛人の間に生まれた四人兄弟の四男。本来ならば当主継承とは無縁の立場だったが、偶然に偶然が重なってその座が転がってきた。

当主就任時の年齢は一六歳で歴代最年少。在位期間は歴代最長になる。

大陸の戦乱が激化した時代、領土拡張路線に大きく舵を切りクオルデンツェ一族を率いて大規模な侵略戦争を開始した。（内地統一戦争）

当時の内地は数多の貴族家がひしめいていたが、それらの分断を煽って対立を激しめ、大義名分を巧みに利用して少数派を作り出すと、数の暴力で踏み潰していった。

個人の武勇に秀でた部分はないが謀略家としての能力は非常に高く、現在まで続く「謀略のクオルデンツェ」という渾名の由来にもなっている。

義理や人情よりも効率や結果を第一に考える気質で、手を組んだ貴族家であっても役に立たなくなる、あるいは邪魔になった時には一切の躊躇なく切り捨てる冷酷さがあった。歴史的事実として、内地に存在していた貴族家はすべて滅亡に追い込まれている。

一時はオビエト河東岸の先にまで領土を広げていたが、最終的には内地のみを残して戦争に一段落つけた。「クオルデンツェ家歴代当主・在位中の領土拡張ランキング」は本作1話時点で1位に輝く。

外交面ではシルオベア家との同盟関係を最重視し、当時のシルオベア家当主の妹を正妻に迎えている。また、ハーティノス市を巡る紛争の中で頭角を現した主祖の子を支持し、貴族家創始のため援助を行った。（現在のエヴェナピス家）

「家史」の著者ティフリイの執筆メモには「本来ならば翻弄されるばかりの乱世にあって、それを最大限活用した傑物。急速な領土拡張により後の世代にいくつもの課題を残したが、それを補って余りある最高の成果を勝ち取った」とある。

魔獣



フィールドで生まれ、フィールドで育ち、最後は外界に飛び出して魔獣災害を引き起こす人類の敵。

直接的な魔獣災害は主として土壌汚染と人的被害の二つだが、強い汚染が撒き散らされた場合はそこから水質汚染や大気汚染に発展し、農業被害、生態系の破壊、飢饉の発生など二次災害に繋がっていくことも珍しくはない。

多種多様な姿をしており、その特性や能力も様々。

魔獣はフィールド内で成長するが、規模の小さなフィールドでは成長限界に到達することができず、未成熟なまま外界に出てくることになる。これは「未熟魔獣」と呼ばれる個体で出現する頻度も高い。

ニューネリーフィールドの場合、軍が確認できただけでも年間最低100体は出現している。なお、これはフィールドごとの特徴が強く現れる部分であり、同一の規模のフィールドでも同様の出現頻度になるとは限らない。

未熟魔獣は数を集めれば隸祖の平民でも討伐可能なレベルの個体が多いが、稀に従祖でも苦戦するほど強い個体が現れることもある。

一方、フィールドの中で成長限界に到達できた個体は「成熟魔獣」として外界に出る。

出現頻度は極めて低く、数十年から数百年、あるいは千年、二千年に一度といったものになる。

強大な戦闘能力と圧倒的な巨体を有するため、現在のエルオ大陸では主祖の存在がなければ討伐は不可能。

成熟魔獣の強さを示す基準「脅威階級」は第一位から第五位の五段階で定義されている。

かつてニューネリーフィールドで爆誕し、ニューネリー市を震撼させた魔獣カリエステーベは脅威階級第二位の成熟魔獣である。

階級が上位になるほど出現頻度は低くなると言われており、最も恐ろしいとされる脅威階級第一位の成熟魔獣はたった二体しかその存在を確認されていない。

レヴィオス家は魔獣エルシニアが史上三体目となる脅威階級第一位の成熟魔獣であると主張しているが、まだ正式には認められていなかったりする。



侯爵嫡男好色物語 ～異世界ハーレム英雄戦記～ ⑥

2024年4月27日初版発行

■著者

原作:AL 漫画:GEN

©AL ©GEN

■発行人

保坂嘉弘

■発行所

株式会社マッグガーデン

〒102-8019 東京都千代田区五番町6-2 ホーマットホライゾンビル5F

(編集) TEL: 03-3515-3872 FAX: 03-3262-5557

(営業) TEL: 03-3515-3871 FAX: 03-3262-3436

■印刷所

中央精版印刷株式会社

■装幀

ZZZAWA design

■小説レイアウト作成

小椋博之、佐藤由美子

初出/MAGCOMI 2023年11月～2024年3月配信分

無断転載・上演・上映・放送を禁じます。

乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

但し古書店で購入したものはお取り替えできません。

定価は表紙カバーに表示してあります。

ISBN978-4-8000-1440-5 C9979

Printed in Japan

本作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件等には一切関係ありません。